

# 新沖縄県平和祈念資料館設立をめぐる

荒川章二

The Establishment of the New Okinawa Prefectural Peace Memorial Museum

はじめに

- ① 設立経緯
  - ② 基本構想・基本計画の策定
  - ③ 監修委員会
  - ④ 展示変更問題
- おわりに

## 【論文要約】

一九九〇年代半ば以降、全国の戦争博物館・平和資料館の展示が、「政治的」(広義の)注目を浴びた。一方で、アジアの平和・協同体制を積極的にどう進めるべきか、そのための障害をどう克服していくかという観点から、他方で、国際的安全保障体制への日本の関与のあり方、派兵問題、憲法改正課題などの関わりから、日本人の戦中・戦後体験を通じて形成された国民の平和観・戦争観とどう向き合い、対応するかが焦点となったからである。従来、国民の平和観・戦争観の領域では、中学校・高校の教科書の内容に注目が集まっていたのだが、より広く、当時各地に普及しつつあった戦争・平和資料館にも視野が及びつつあった。

ちようどその時期に、新沖縄平和祈念資料館の建設が進んでおり、最終的な展示案

をめぐる以下二つの価値観が衝突し、沖縄の人々が目指す「平和」とは何かが広く問われた。

本稿は、この問題に関し、第一に、一九七〇年代に旧沖縄県平和祈念資料館が設立された時期の設立理念、それを具体化した展示の確定過程にさかのぼって、先ず沖縄の平和資料展示が達成した地平を確認したうえで、展示の基本構想・基本計画・監修委員会での議論を積み重ねながら、沖縄戦体験と戦後占領体験を背景に形成された「沖縄のこころ」を世界に発信することで平和創造を目指す展示案を紹介する。第二に、この展示案に対する、「もう一つ」の戦争観・平和観の立場からの対抗を、具体的な展示変更案の現れ、というレベルから見えていく。

## はじめに

国立歴史民俗博物館の共同研究「近現代の兵士に関する諸問題」では、近現代の戦争展示のあり方を考える一つの前提として、全国の平和・戦争関係資料館の現地調査を活動の一方の柱とした。本稿で取りあげる新「沖縄県平和祈念資料館」も共同研究の調査対象であった。

沖縄県平和祈念資料館は、二〇〇〇年四月、一九七五年に開館した旧「沖縄県立平和祈念資料館」を移転改築する形で開館した。常設展示室五室、企画展示室、子供・プロセス展示室、情報ライブラリー、平和祈念ホールなどの施設を有し、年間約四〇万人の入館者が訪れる。この入館者のうち、約三〇万人は沖縄県外・外国からの観覧者であり、かつ国内の観覧者は、全国的な広がりを持っている。また、沖縄県平和祈念資料館は、「悲惨な沖縄戦の実相を後世へ正しく継承するとともに、二一世紀の平和創造への貢献を目指し、全ての戦没者の名前を刻んだ『平和の礎』と一体となって、平和を何よりも大切にする『沖縄のこころ』を世界に発信し、人類の恒久平和に寄与する拠点施設」と位置づけられているように、沖縄戦の教訓の継承と平和の創造という明確な目的意識を持って設立されている平和資料館である。そしてその目的は、開館二年間における五万八〇〇〇余のアンケートを整理した結果が示す、五つの展示室とも「よく理解できた」・「興味をもった」の合計が七割前後から八割に達していること、戦争の悲惨さや平和の尊さを「非常に感じた」が八割に達していること（感じない・分からない合計で七割）等が示すようにかなりの程度達成されていると言えるだろう。したがって、この沖縄県平和祈念資料館は入館者数の数と広がり、メッセージ性の強さ・その受容度という両面から見て、広島平和記念資料館等と並ぶ国内有数の平和資料館と言えよう。

本稿はこのような点に注目して調査対象となつたいくつかの平和・戦争資料館のうちから沖縄県平和祈念資料館を特に取りあげたが、その主たる考察対象は、設立理念と展示構想が最も明確に浮き出る、設立前史を含む設立過程に限定した。その際、同資料館の分館である「沖縄県八重山平和祈念館」も併せて考察の対象とした。

設立過程を中心とする具体的な考察の内容は大別して以下の四つの側面であり、本稿中の各章にほぼ対応する。

第一は、新資料館が引き継いだ旧資料館の発足経緯、および八重山平和祈念館設置の背景である。

新資料館は一九七五年開館の旧資料館理念の継承と発展という形で建設されているが、その旧資料館の設置当初、展示のあり方につき批判が起こった。そしてそこから平和資料館の位置付け・目的、あるいはその目的を実現するための展示方法につき議論・調査が重ねられ、それを通じて上記の「沖縄のこころ」が設立理念として明文化される所まで行き着いた。その結果、平和資料館の展示は、地域の「こころ」・精神を表すものと明確に自覚された上で再構築され、かつその設立理念が設定後三〇年近い今も新資料館に引き継がれていることが示すように、また、時に、沖縄の議会でも平和政策をめぐって「沖縄のこころ」が取りあげられるように、そこで明文化された「沖縄のこころ」は、地域の人々の精神の中に深くしみ入っていた。言うまでもなく、広島や長崎の平和資料館も、人類は核兵器と共存できないと言う明確なメッセージを発信しているのであるが、「広島（ヒロシマ）・長崎のこころ」、あるいは「ヒバクシャのこころ」が館の設立理念として明文化されているわけではない。それに対し、館の設立理念をめぐる議論をめぐって一九七八年に再出発した沖縄の平和資料館は、平和資料館はなぜ必要なのか、その意義・役割はどこにあるのか、という平和資料館設立の根本までさかのぼって改めて考えさせてくれる事例なのである。

一方の八重山平和祈念館は、戦争マラリア犠牲者補償運動の一つの成果として今回新たな設立の日程にあがったものである。同補償運動の経緯を見ることで、なぜ八重山地域に「戦争マラリア」を中心テーマとする平和祈念館が設置されたのかを確認できる。また、八重山平和祈念館については、補償運動を通じて明らかになってきた八重山におけるもう一つの沖縄戦（地上戦に巻き込まれなかった地域での沖縄戦）、その象徴としての「戦争マラリア」の実相が、この平和祈念館の展示としてどのように具体化されようとしたのか、そしてそれがどのような意味を持つていたのか、についても考察する手がかりを与えてくれよう。

第二は、新資料館の構想から展示の具体化にいたる設立の経緯である。この設立経緯を示す資料としては、基本構想・基本計画・資料館の建物建設の経緯などの資料はもとより、展示変更問題の結果として公開された監修委員会の議事録と展示説明資料、あるいは展示を請け負った業者側の資料などから、基本計画に沿いつつ展示をどう具体化するか、に関する検討過程を見ることが出来る。限られた展示室スペースや展示と言う表現方法の限定の中で、歴史研究者・博物館の展示や運営にかかわる諸分野の専門家たち、さらに展示業者たちの間でどのような議論あるいは調査が重ねられたのかを知りうる興味深い事例といえる。その議論の内容は、戦争展示の基本設計、資料館・博物館が現在とどう向き合うのか、あるいは展示の技術的問題にいたるまで大きな示唆を与えてくれるものである。八重山平和祈念館設立経緯にかかわる資料はそう多くないが、監修委員会での議論の要点は知ることが出来る。

ただし、沖縄の外に住む筆者が収集できた資料は、公開資料の限定性も加わって、設立過程にかかわる資料の一部であり、主な資料だけでも、基本構想策定過程の資料、基本計画策定委員会の議事録、最後の半年間の監修委員会議事録（一九九九年一〇月以降）などは見る事ができなかった。本稿は、このような資料収集の限界の中での作業である事をお断り

しておきたい。

第三に、同資料館の設立過程は、平和・戦争資料館や展示をめぐる政治的対抗、そして政治介入の問題を表面化させた。

両施設ともに、監修委員会の作業が大詰めに近づいていた時点で、沖縄県幹部が監修委員会に無断で展示を改変・改竄するという（あるいは「改竄した」）政治的介入事件がおこり、それが地元紙の取材を通じて表沙汰になると県政を揺るがす問題に発展した。改変しようとした内容やその意図は、地元紙の精力的な追及と県議会での論戦を通じてある程度明らかになっており、平和博物館展示（戦争の記憶、平和認識の具象化）と政治（「国益」）という問題について、監修委員会の展示構想に対し県幹部がどのような展示を対置しようとしたのか、と言う地域の具体的なレベルから考えさせる事例を提供している。

第四に、上記の事情から、最終盤での監修時間の不足が生じ、新資料館は、監修委員会による展示指導の不足、あるいは最後のツメを欠いた部分を残し見切り発車的に開館した。監修委員の一人の大城将保によれば、「時間がなく七割程度の仕上げで開館となった」という<sup>(4)</sup>。そのような事情もあり、開館後、展示内容への部分的批判も行われており、それらも参考にして、本稿でも展示内容の問題点や課題にふれておきたい。

なお、沖縄県平和祈念資料館・八重山平和祈念館設立については、既に註(5)のように、監修委員など沖縄県内の当事者を中心とする多くの論考があり、特に共同研究「争点・沖縄戦の記憶」は当事者としての記録性と考察の両面で優れた仕事である。本稿はこれらの先行する成果を参照しつつ、沖縄平和祈念資料館の設立経緯から考えるべきいくつかの問題を考察してみたい。

## ① 設立経緯

### 1 旧資料館における展示の見直し

旧平和祈念資料館は、一九七五年六月、復帰記念三大事業の最大イベントとしての海洋博（名譽総裁皇太子）に間に合わせてオープンした。資料館設立の直接の動機は、佐藤内閣当時の復帰問題対策担当大臣山中貞則総務長官（初代沖縄開発庁長官）の意向であったという。沖縄戦資料館の設立運動は民間サイドで一〇年前から進められていたのであるが、それらの運動とは無関係に、「学識経験者の参画もなく、県の関係機関との連絡調整もなされず、企画委員会、運営委員会も設置されぬままに生活福祉部の援護課を主管として館の建設工事中から展示にいたるまですべて閉鎖的な行政ペースで推進された」。

また、資料館の管理運営は、財団法人沖縄県戦没者慰霊奉賛会に委託された。「資料館設置条例」には、運営委員会の設置も学芸員の配置も定められておらず、戦跡霊域の管理団体に資料館の運営を白紙委任する結果となった。

このため、出来上がった資料館は「旧陸軍の記念館」となった。「入口を入ると、正面に大きな日の丸が掲げてあり、牛島將軍ゆかりの遺品や軍服、軍刀、辞世の歌などが導入部になり、その奥には、銃器、刀剣、鉄カブト、弾薬、軍装品など、おびただしい旧軍関係の遺品がガラスケースの中にうやうやしく陳列」されていた。「それにひきかえ、一般住民の戦場体験に関する展示品は一点もみあたらないし、解説さえされていない」かった。

このような展示となった理由を、沖縄県史や那覇市史に携わっていた研究者たちは、「こういふ軍隊中心の展示は、ことさらそういう意図が

あつてそうなのではない。これまで遺骨収集の際に埋没壕から発掘された遺品は援護課を通じて奉賛会に寄託されてきたが、そのコレクションを開陳したらこういう結果になったというにすぎない。」「つまり、沖縄戦とは何だったのか、それをどう展示すれば良いのかという明確な展示理念をもたないままに物を羅列した結果がこれであった」と考えた。そして、これらの研究者たちは「沖縄戦を考える会」（準備会）を結成し、六月二〇日付けで屋良知事と県議会に対し展示内容の問題点を指摘し（旧日本軍を記念し顕彰する展示、県民の戦争体験を物語る物のない県民不在の展示、研究成果と専門的技術を反映していない、など）、展示改善を求める意見書を提出した。そしてこの意見書を契機に、他の研究団体、教育団体、平和団体からの展示改善要望が相次ぎ、地元マスコミの注目も集めた。

これらの改善要求の高まりに対し県は「県立平和祈念資料館運営協議会設置要綱」を制定し、一九七六年六月、学識経験者と県の関係機関職員からなる運営協議会（委員長中山良彦）が発足した。

委員会の最初の仕事は、先の理念なき展示という批判を反映すれば、資料館設立の基本理念を策定することだった。委員会は三回の会議を重ね、一九七六年九月二五日、県知事に設立理念を答申した。その結果、資料館の入口に掲げられることになる設立理念は以下の通りである。短い文章の中に、沖縄戦の位置付け、特徴、沖縄戦体験から生まれ、占領体験を通じて育てられた「沖縄のこころ」、そしてその沖縄のこころを「県民個々の戦争体験を結集して」アピールすると言う展示の基本姿勢が凝縮されて表現されている。そして、ここで定式化された「沖縄のこころ」は、以後三〇年間にわたり繰り返し確認され続け沖縄県民の認識に定着し、若干の修正がされた上で新資料館の設立理念として受け継がれた。

一九四五年三月末、史上まれに見る激烈な戦火がこの島々に襲つ

てきました。九〇日におよぶ鉄の暴風は鳥々の山容を変え、文化遺産のほとんども破壊し、二〇万余【二〇数万】の尊い人命を奪い去りました。沖縄戦は日本に於ける唯一の【挿入：県民を総動員した】地上戦であり、太平洋戦争【アジア・太平洋戦争】で最大規模の戦闘でありました。

沖縄戦の何よりの特徴は、軍人よりも一般住民の戦死者がはるかに上まわっていることにあり、その数は十万余【二〇数万】におよびました。ある者は砲弾で吹きと【飛】ばされ、ある者は追いつめられて自ら命を断ち【断たされ】、ある者は飢えとマラリアで倒れ、また、敗走する自国軍隊の犠牲にされる者もありました。私達沖縄県民は、想像を絶する極限状態の中で戦争の不条理と残酷さを身をもって体験しました。

この戦争の体験こそ、とりもなおさず戦後沖縄の人々が米国の軍事支配の重圧に抗しつつ、つちかってきた沖縄のこころ【心】の原点であります。

“沖縄のこころ”とは人間の尊厳を何よりも重く見て、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心であります。

私たちは戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次代に伝え、全世界の人びと【々】に私たちのこころ【心】を訴え、もって恒久平和の樹立に寄与するため、ここに県民個々の戦争体験を結集して、沖縄県立【沖縄県】平和祈念資料館を設立いたします。

【一】は、新資料館設立時に行われた訂正の箇所。戦争の呼称と犠牲者数、集団死の位置付けが大きな修正点である<sup>(8)</sup>

この時の展示見直し作業では、基本構想から展示にいたるまでの全行程に責任を持つ総合プロデューサー方式をとった。その下に運営協議会

がおかれ、さらに運営協議会の下に、総合プロデューサーを中心として具体的な展示を立案する展示専門委員会がおかれた。この体制の意味を、今回の新資料館準備体制と比較して、両方の準備作業に加わった大城将保は次のように指摘している。「今回の新館展示の場合、決定的な違いは総合プロデューサーと展示専門委員会が設置されなかったことである。総合プロデューサーは展示業者との契約に含まれてなかったし、展示専門委員会に相当する『ワーキング・グループ』は、当初から監修委員会のもとに設置するように図示されていたにもかかわらず、予算措置さえなされていなかった。明らかに事務局のサポーター（怠慢）である。……総合プロデューサーとワーキング・グループの不在は行政主導の密室型作業におちいり、問題の『展示改ざん事件』をゆるす温床になったと考えるしかない。結局、どたんばの段階で総合プロデューサーとワーキング・グループの作業を監修委員会が肩代わりすることになるが、資料調査の時間は皆無にひとしく、会議日数も休館の場合と比べて十分の一にも満たなかった<sup>(9)</sup>」。

展示改善の具体的な作業は、展示計画委員、展示演出委員、専門委員と作業委員会の名称を変えつつ進められたが、メンバーは展示批判の口火を切った「沖縄戦を考える会」会員を中心に中山良彦、安次富長昭、田港朝昭、安仁屋政昭、久手堅憲俊、真栄里泰山、高良倉吉、石原昌家、大城将保らであった。その展示再構築の作業は、一九七六年末から丸二一年間にわたるが、その作業量は以下の通りである。会議の平均時間は六〜八時間、現地調査やキャプション作成作業日数は合計で延べ二〇〇日を超える。委員会の性格や設立作業の進め方が異なるので単純比較は出来ないが、毎回会議時間は新資料館の監修委員会の会議時間を遙かにうまわっており、作業委員の凄まじいエネルギーが投入された結果、一九七八年一〇月、改装展示がオープンした<sup>(10)</sup>。

構想段階（一九七六年十一月〜七七年三月）展示計画委員

会議一六回 一三九時間(平均八・七時間)

現地調査 延一九日

展示計画段階(一九七七年一〇月～七八年三月) 展示演出委員

会議二一回 一二七時間(平均六・〇時間)

現地調査 六日

展示施行段階(一九七八年四月～七八年一〇月) 展示演出委員・展示技術者

会議一七回 一〇〇時間(五・九時間)

現地調査 延一〇七日

専門委員―列品作業・キャプション作成 九日・八七日

新資料館が、旧資料館から引き継いだ最も重要な部分は先の設立理念、そして沖繩戦体験の「証言」の展示、および沖繩戦展示の「結びのことば」である。このうち沖繩の平和資料館が独自に開発した「証言」展示という方法も、この展示再構築作業の中で発見、開発された。

この証言展示創造の過程について、総合プロデューサーの中山良彦は、後にこう回想している。「モノの選択もそしてその展示方法も、『資料館で何を語るべきか』の明確な認識によって決定される」、「大事なものは、何を何故展示するのか、というフィロソフィーの明確化だ」。しかし、その何を語るべきかが決まった時、一番苦労したのは「失語症に陥るほど恐ろしい住民の戦争体験を、的確に伝達できるモノが、果たしてあるのだろうか」と言う問題であった。資料収集に出かけても成果は乏しかった。そこで行き着いた結論は、「モノに語らせる、は博物館展示の原則である。しかし今一度、原点に戻ってみるべきではないか。私たちは博物館をつくっているのか? 『住民の視点で語る館』を作るのが私たちの作業の目的で、博物館ではないのではないか。これが私たちの結論だった。証言を展示物にしよう、という方向はこの認識を確認する中から生まれた」。この方針により、証言の選出が始まった。県史、市

史、民間出版物、証言の録音テープから、証言の読会を百時間余も重ねた結果第一次証言集が作成され、さらに推敲を重ね第四次証言集まで作成した。その中から二百人分の証言を選び出し、「時期、場所、戦況の進捗度や緊迫度などで約三十の分類項目を作成し、二百の項目を三十の項目に基づいてバラバラに分解する。解体といった方が適当かもしれない。証言をバラバラに切り刻むのである。次は千余の断片となった証言を、設定した時期、場所、戦況進捗度などの項目別にグルーピングし、グルーピングで出来た約三十の証言断片の束を一本のストーリーになるように並べるのである。それから米軍資料や防衛庁資料と照合して推敲を重ね完成する。こうして出来上がった証言を改めて読んでみて、皆その成果を驚いた。例えば牛島司令官自決前後の摩文仁だが、一人一人の証言を原型のまま読んでいたら、なかなかイメージが結ばれないが、この方法で多数の人に一齐に一面について語らせると、それぞれの見方は異なるにもかかわらず、かえってそれが全体像を立体的に浮かび上がらせる効果となり、状況が明確になっていくのである。私たちは、この方法で仕上げた証言集を使って、証言を展示物にする、という前代未聞の、<sup>(1)</sup> 暴挙とも言える展示方法を、やってのけたのである」。

この体験証言を文字で展示することに関し、主要な難点は二つ意識されていた。「本来、実物展示を原則とする資料館で文字を読ませるのは正統な方法ではなく、「また、住民証言は個々人の視野でしか対象を捉えきれないから歴史展示としての客観性がよわい」という問題である。そして、展示委員会は「実際の証言記録を徹底的に読む込むことでクリア」しようとした。上の中山の指摘とも重なるが、「沖繩県史」の沖繩戦記録一・二巻、『那覇市史』戦時記録、石原昌家著『虐殺の島』を全員で輪読すること数回」という集団的な読み込みを行い、「その中から①最もインパクトの強い証言を選びだし、その中から②沖繩戦の本質にせまる証言を抽出して展示ストーリーにそって配列し沖繩戦の

全体像が浮かび上がるような構成を工夫した」という<sup>(12)</sup>。その際の証言の選び方としては、「生身の人が本当にしゃべっているような文体の部分を」選び、論文風、手記風な文章は避けた、という<sup>(13)</sup>。

では、その展示証言作成作業の前提となった『沖縄県史』の沖縄戦記録は、どのように編纂されたのか。その方法は、以下の文章が集約的に語っている。「記録と調査には独自の方法が考案された。……沖縄戦体験の場合はまず手記を書かせるのは無理である。沖縄戦の三か月余の戦場生活は『人間が人間でなくなる体験』であった。誰しも思い出すだけに身震いするような記憶を無数にかかえている。ふだん凍結し埋もれていた記憶群がいったん噴出したすと眠りにくい夜が数日は続くし、ひどい場合は病人同然に寝込んでしまう人もいる。『沖縄県史』の審議会と作業チームが考案した手法は、集落ごとに体験者に集まってもらって、座談会や個人面談で個々人の戦場行動の記憶を証言してもらい、録音したテープをもとに証言記録を作成していくのである。はじめのうちはなかなか語りたがらない凍結された記憶が、話していくうちにだんだんよみがえり、信じられないような戦場の実相が次々と明るみに浮上してくるのであった<sup>(14)</sup>。こうして採集し、編集された証言記録を、沖縄戦の全体像を住民の視点から再構築する立場から専門研究者集団で読み込み、リアルで、かつ沖縄戦の本質にせまると考えられる証言を選び出し、次いで、南部撤退、ガマ、汚辱の戦場、シューサイド・クリフといった大括りのテーマに沿って証言を配列し、ある場面・出来事を様々な体験証言から多様に描き出したのである。この過程では、証言のリアリティー（記憶の確かさ）の保証となる緊張関係が幾重にも設定され、そのことが歴史展示としての客観性の保証につながっていると見えよう<sup>(15)</sup>。

資料館が、住民の沖縄戦体験記録を中心に再編された時、次の問題はガラスケースに大事に陳列されていた武器・弾薬の処理であった。この問題でも議論が重ねられたが、戦場跡を象徴する展示として、資料・遺

品ではなく、「避難民たちが目撃した戦場の光景を構成するオブジェ」と見立て、「廃墟となった戦場跡」というテーマにして資料館入口に展示した。この発想も、新資料館に、銃器・鉄カブトをまとめてゲージに入れて空間的演出に使うという展示として引き継がれているが、沖縄住民が目撃した戦場の光景の象徴、というインパクトは弱くなっていると思われ<sup>(16)</sup>。

展示再構築の最後の仕上げは、旧資料館の展示全体をしめくくる「結びのことば」の作成であった。結末のアピール文はある詩人に依頼してあったが、住民の証言と二年間つきあってきた感覚から見ると「美しすぎて弱すぎた」という。そこで展示演出専門委員は証言に込める形で「なるべく美辞麗句を廃して、ひとりつぶやくような」、自分たちなりの率直な言葉を持ってアピール文を合作した<sup>(17)</sup>。展示再構築を担当した研究・技術者集団が、このような詩まで作成したこと自体が驚きだが、以下のように、日本国憲法序文の平和創造の精神を、地域のことばとして見事に表現したアピール文であり、新資料館においては、沖縄戦展示が終わった所のニュートラルゾーンにそのまま掲げられている（いったん、後述のように消されかけたが）。この詩は、歴史研究者が地域社会の記憶（こころ）と誠実に、深く向きあった時の可能性を感じさせてくれる。

沖縄戦の実相にふれるたびに 戦争というものは これほど残忍で  
これほど汚辱にまみれたものはないと思うのです

この なまなましい体験の前では いかなる人でも 戦争を肯定し  
美化することは できないはずです

戦争をおこすのは たしかに 人間です しかし それ以上に 戦  
争を許さない努力のできるのも 私たち 人間 ではないでしょう  
か

戦後このかた 私たちは あらゆる戦争を憎み 平和な島を建設せ  
ねば と思いつづけてきました

これが あまりにも大きすぎた代償を払って得た ゆずることのできない 私たちの信条なのです

## 2 教科書問題と県議会決議

一九八二年、高校日本史教科書への検定により、沖縄戦における日本軍の住民虐殺事件が削除された。この時、住民虐殺の論拠となる『沖縄県史』も「第一級資料ではない」とされた。さらに、この検定での修正要求は、これだけでなく沖縄戦犠牲者の数や犠牲の性格にかかわる叙述にもおよんでいたことが明らかになった。この時の検定では「侵略」という表現や南京大虐殺など加害、戦争の評価、さらに人権にかかわる修正要求も多く、沖縄戦の叙述に関する修正要求もその重要な一環であった。

教科書検定による沖縄戦での住民殺害という史実の削除は、『沖縄県史』沖縄戦記録や平和資料館の証言展示などに示された県民の沖縄戦の記憶の否定であり、沖縄県民の世論を刺激するなかで、マスコミの連載報道や諸団体の抗議行動が始まり、その中で九月四日沖縄県は臨時議会を開催し、「教科書検定に関する意見書」を採択した。また、その後県内の市町村議会でも意見書採択が相次いでいる。

この県議会において全会一致で可決された意見書は、沖縄戦の評価に関わり「県民殺害は否定することのできない厳然たる事実であり、特に過ぐる大戦で国内唯一の地上戦を体験し、一般住民を含む多くの尊い生命を失い、筆舌に尽くしがたい犠牲を強いられた県民にとって、歴史的事実である県民殺害の記述が削除されることはとうてい容認しがたいことである。」と指摘している。<sup>(18)</sup>日本軍の県民殺害は沖縄戦評価の根幹に関わり、沖縄戦体験ではゆずることのできない部分であることが、県議会の総意と一言で確認されたのである。県議会の総意は、県民の沖縄戦認識の集約と言える。だから、この日本軍の住民虐殺に関する県議会

の決議は、新資料館の展示を設計する場合の最も重要な立脚点となった。そのことは、展示改竄をめぐる県議会の論戦で、この時の決議の意味が確認されていることや、監修委員会でのガマ展示をめぐる議論にも現れている。<sup>(19)</sup>

上記の事態は、あえて一般的に考えれば、県議会という「政治」が、県民の戦争認識にある枠を嵌めるといふ問題性を含んでもいようが、沖縄では、新資料館展示改竄事件の最中の一九九九年九月一八日のシンポジウムでも新たに日本兵による住民殺害事件の証言が現れるなど、繰り返し新たな事実（証言）によって戦争認識が検証されつづけており、日本軍の脅威の否定は、着剣した銃をもつ日本兵から「子供を泣かすと殺す」と脅されたことを証言してきた女性が、「私は事実を語ってきた。それを否定されると、語り続けた私は何のために生きてきたのか分からなくなる」と訴えるように、多くの沖縄戦体験者の戦後を生き続けた意味にもかわる性格をもっている。<sup>(20)</sup>形に現れたのは議会の議決と言う政治であるが、ことは政治を超え、沖縄戦の中で起こったまぎれもない事実を事実として認識し、県民の代表者集団として対外的に表明したということになろう。

しかし日本軍による住民殺害という事実は、日本軍という軍隊の評価に直結する問題であり、国の戦争責任にもかかわる。そのため以後の検定では、沖縄戦での集団自決を強調して書かせることで、県民殺害の印象を薄める指導を行うことになる。そして、この検定のありかたが、家永裁判第三次訴訟（一九八四年～一九九六年）の沖縄戦関係での主要争点となった。沖縄戦の基本的特徴を、「国内が戦場化して国民が地上戦に巻き込まれたとき、軍事がすべてに優先して、自国軍隊が自国民の生命・財産を守るところか、それを奪ったという事実」に求め、その立脚点から従来、住民の集団自決と表現されていた事態を「日本軍の強制による集団死」としてとらえるのか、それとも住民の非業の死に関し、

集団自決「崇高なる犠牲的精神による自発的な死」を強調し、日本軍の責任、国家の戦争責任を不問に付すのか、これが次の具体的な争点だった。争点は一見移動しているように見えるが、戦場で沖縄住民が見た日本軍の性格が問われつづけていたことは変わりない。

沖縄戦の基本的特徴を示す軍隊と住民の緊張関係をどうとらえるか、「集団自決」と表現されてきた事態の性格・背景をどう見るか、これらの点は、沖縄戦認識をめぐる沖縄県民の記憶と政治Ⅱ国家の対抗軸であり、この対抗軸を背景に平和資料館の具体的な展示のあり方が模索、展開される。新資料館の展示においてガマが焦点となる理由はここにあった。

### 3 八重山国家補償問題と祈念館設立計画

一九四五年四月、波照間島住民は、軍命によりマラリア有病地である西表島に強制的に退去させられた。また、六月一日、石垣島でもマラリアを媒介するハマダラ蚊の生息地帯である山岳地帯に退去せよとの軍命（八重山旅団、兵力約一万人）が発せられた。米軍の上陸作戦を前提とした戒厳令状態の中の指定地域への避難命令であり、通例の避難とは異なり、指定された地域への強制退去命令であった。

その結果、八重山諸島の人口三万一〇〇〇人のうち約半数がマラリアにかかり、うち三六〇〇人が死亡した。特に波照間島では人口約一六〇〇人のうち約五〇〇人、住民のほぼ三人に一人がマラリア病で死亡した。八重山諸島の人々はマラリアの怖さを十分に承知しており、軍命による有病地への疎開という強制がなければあり得なかった犠牲であった。戦争と軍隊の命令がからんだマラリアであり、だからこそ「戦争マラリア」と称された。

この戦争マラリア犠牲者の補償要求の動きが具体化したのは「沖縄戦強制疎開マラリア犠牲者援護会」が結成された一九八九年である。以後、

同会は援護法の適用による犠牲者遺族への補償を国家に要請しつづけた。同年、沖縄県議会は全会一致で「沖縄戦強制疎開マラリア犠牲者の遺族補償に関する意見書」を採択し、沖縄県行政もこの補償要求を支援した。

一九九一年、沖縄県は「沖縄県立平和祈念資料館改築・沖縄戦犠牲者『平和の壁』建設等基本構想検討懇話会」の中に「八重山地域マラリア犠牲者部会」を設置した。同部会は軍命を裏付ける地元資料の発見など精力的な現地調査をふまえて「戦時中の八重山地域におけるマラリア犠牲の実態」という報告書をまとめ、何れのケースについても軍命による一般住民の有病地帯への強制退去という事実を認めた上で、これらの犠牲者への援護法適用を妥当であると結論した。なお、八重山諸島に配置されていた部隊のうち六七名が戦死、戦病死しているが、戦病死の大部分はマラリアによるものと推定されており、これら戦病死者には既に援護措置が講じられていた。

こうした沖縄での動きを受けた政府は三省庁（沖縄開発庁、厚生省、内閣官房）マラリア問題連絡会議を組織し、政府与党戦後五〇年問題プロジェクト全体会議に沖縄県の「マラリアの犠牲の実態」報告書への疑問を提出した。主張の要点は、軍命の存在不明を論拠とする国のマラリア補償の否定であった。これに対し犠牲者援護会の抗議的要請行動があり、結局、政府は、実質的な見舞金支給と慰謝事業の実施を条件に、焦点の軍命につき「住民は軍命と受け止めざるを得なかった」という表現で政治決着を図った。援護会は国の責任の欠落への不満を表明しつつも、高齢化した遺族への配慮もあり「苦渋の選択」としてこの案を受け入れた。軍命での犠牲を認めれば、ここでも軍の責任と国家の戦争責任が問われざるを得ない。国側はその点を回避しつつ、沖縄県が実施する形をとった見舞金支給を決定し、同費用を含め一九九六年度予算として、三億円の慰謝事業費を計上した。県はこの予算で、慰霊碑の建立、記念誌の発行、犠牲者追悼、マラリア祈念館建設の四事業を行うこととし、こ

ここに八重山の平和祈念館建設計画が始まった。従って八重山資料館でも展示の焦点は、八重山旅団の責任問題であった。<sup>(21)</sup>

## ② 基本構想・基本計画の策定

### 1 基本構想

一九九四年一月、「平和祈念資料館移転改築事業」推進検討委員会がスタートし、翌九五年一月には『平和祈念資料館移転改築基本構想』が公表された。<sup>(22)</sup>

基本構想では、改築の背景と目的について、現資料館では、沖縄戦の実相すべてを展示することが出来ていないこと（沖縄島中部から南部の戦場中心）、館独自の平和事業活動が十分でないこと、基地被害の歴史を通じて考えさせられてきた構造的暴力への注目が必要であることを指摘し、「沖縄のこころ」を再確認したうえで、新資料館に世界への平和の発信による積極的な平和の島の建設を目指す中核施設としての位置付けを与えている。総合的なイメージとしては、「新資料館の建設にあたっては、現資料館の『設立理念』と『展示のむすびのことば』の精神を継承し、沖縄戦の実相のすべてを余すことなく描き、加えて、新機軸の展示として、戦後沖縄の歩みと基地問題、いわゆる一五年戦争における近隣諸国への加害、積極的平和観に基づく人権や環境破壊等の問題を、沖縄の視座から捉える。さらに、平和学習及び平和研究等の施設機能の充実と、様々な事業活動が積極的に展開できる体制を整え、『平和の発信地沖縄』の中核施設として、一層の拡充を図る」というまとめに集約されよう。新資料館が、旧資料館の「移転改築」と位置づけられたのは、旧資料館の理念と精神の継承・発展・充実化という側面を何よりも重視したからであろう。

また、新資料館は、「平和の礎」と対をなす、と位置づけられている。先行する「平和の礎刻名委員会」での議論では、「①平和の礎と新平和祈念資料館の展示を一体のものとして位置づける。礎はモニュメントとして純粋性と象徴性を高めるため刻む内容は極度に単純化すべきである。②一方の資料館では沖縄戦の実相をありのままに展示し、多くの情報をもりこんで平和学習や平和研究に役立てる。③戦没者はすべて平等に扱い、特定の団体や職域や階級に区分せず、出身地べつに配列して、個々の姓名が沖縄戦で失われた個々の人間存在を象徴するように刻名する。平和の礎は①戦没者の追悼と平和祈念、②戦争体験の教訓と継承、③安らぎと学びの場、の三本柱を基本理念としているが、……『戦争体験の教訓と継承』という課題は資料館の責務であり、『礎』の純粋性・象徴性を裏打ちする意味でも戦争のもつ非人間性や残忍性等の実相は資料館で展示しなければならぬのである」と両施設の独自性と一体性が企図されていた。<sup>(23)</sup>

展示の構想は、表1-1（表1は「基本構想」と「基本計画」の比較を意図して作成したが、紙面の関係で前者を表1-1、後者を表1-2として分けて掲載した）として整理した。常設展示では、プロローグとしての沖縄の海（沖縄のこころの象徴としての海、平和・命の源泉・世界をつなぐというイメージの提起）から始まり、パート1が、沖縄戦への道、沖縄戦の実相からなるが、新たに「15年戦争での日本の加害やアジアの人々の痛み」が強く意識されている。パート2は、歴史展示の新企拡大部分で、占領統治とその後も続く基地問題から平和の問題を検証するねらいであった。パート3は、沖縄の視座から世界の平和と戦争の諸問題の現状、そしてより広く平和への脅威として構造的暴力を考える展示構想であり、積極的な平和の創造という館の目的を体现する部分であるが、展示の具体化は最も難しい所であった。

積極的な平和創造については、パート3とともに「県民や来館者の積

表1-1 『基本構想』における「展示の構想」と『基本計画』における展示のねらい・項目・細目・事象

<p>3-1 20世紀の戦争と平和・沖縄の体験 — 常設展示</p>	<p>常設展示では、沖縄戦、米国統治時代、その後の基地問題など、沖縄で起こった歴史的事実を中心に描きだし、その総括から、不戦と平和創造の決意をアピールしていく。 ここでは、戦争の残虐さ悲惨さを、住民の視点から訴えかけていくことに力点を置く。また、科学的な視点から戦争は、決して偶発的、運命的なものではないことも強調していくとともに、戦争の痛みを個人レベルの問題として直感的に捉えられるような展示に心掛け、来館者の心の中に、平和への決意と希望の火がとるようにする。</p>
<p>プロローグ かりゆしの海むすびの海</p>	<p>沖縄の歴史や文化は、古来から海によって育まれてきた。「沖縄のころ」は海に深く根ざしており、ニライカナイに象徴される海は、豊かな恵みをもたらす生命の源として、今なお、人々の心の中に息づいている。また、平和愛好の民として、近隣諸国との交易に生きてきた歴史を持つ沖縄の人々にとって、海は世界への平和と友好の架け橋でもある。 プロローグでは、この沖縄の美しい海に、「沖縄のころ」を象徴させるとともに、無数の命を育み、世界をつなぐ海に、平和のイメージをダブらせて物語り、常設展示の導入としていく。</p>
<p>パート1 近現代史からみた沖縄戦の実相</p>	<p>沖縄の平和と友好の海は、日本の近代の幕開けとともに緊張の海へと変化し、沖縄戦の悲劇への道が始まっていく。パート1では、戦争の残虐さ悲惨さを訴えかける沖縄戦の展示を中心に、琉球処分から沖縄戦終結までを民衆の視点で物語っていく。 【沖縄戦への道】 近代日本にとっての沖縄の地政学的な意味を示すとともに、琉球処分に始まって沖縄戦に巻き込まれる経過を科学的に検証する。また、その歴史の流れの中で、南進政策による沖縄の南洋移民の戦争犠牲について明らかにするとともに、15年戦争での日本の加害とアジアの人々の痛みにも触れる。 【沖縄戦の実相】 昭和20年3月末、史上まれにみる熾烈な戦火が、鉄の暴風となって3ヶ月余にわたって、この沖縄の島々に吹き荒れ、島々は山容を変え、文化遺産は破壊しつくされ、20万余の人々の生命を奪い去った。私達沖縄県民は、想像を絶する極限状態を経験した。この沖縄戦での地獄図を、民衆の視点で描き、その非人間的で残虐な実相を明らかにし、戦争の不条理と残酷さを訴えていく。 また、戦争が原因で、今日まで引き継いでいる諸問題にも言及し、戦争や歴史のうねりの狭間で犠牲になるのは、常に民衆であることを教訓として伝えていく。</p>
<p>パート2 沖縄から考える戦後50年の戦争と平和</p>	<p>鉄の暴風が去り廃墟と化した島で、収容所をでた民衆を待っていたのは、米国の軍事支配による祖国からの分離であった。27年にも及ぶ異民族の軍事支配の下で、沖縄で起きた出来事を通して、平和の問題を検証していく。 【27年の米国統治と基地問題】 27年にも及ぶ米国統治の下での基地被害や人権抑圧、平和を希求する復帰運動などを物語るとともに、復帰後のなお残る基地被害の実態等を明らかにする。戦争が終わっても、なお、恒常的に戦争と隣り合わせの生活を強いられてきた沖縄の状況から、今日の戦争と平和の問題を考えていく。</p>
<p>パート3 「沖縄のころ」を世界へ</p>	<p>常設展示の最後となるパート3では、沖縄の視座で世界へ眼を向け、今日の世界を取り巻く戦争と平和の諸問題を明らかにする。 沖縄がかつて経験し、現在も直面している基地問題等をはじめ、貧困、飢餓、人権抑圧、そして環境破壊などの構造的暴力を地球的規模に視野を広げて言及し、平和への脅威は、一人ひとりのライフスタイルにも関わっていることを伝えていく。 先進国の価値観に翻弄された近現代そのものへの問いかけを行なうなかで、沖縄戦を体験し、伝統と現代を共存させながら平和を希求する思想を発展・深化させてきた沖縄の「不戦」、「和解」、「協調」の精神「沖縄のころ」こそが、目前に迫った21世紀を平和の世紀としていく原動力となることを世界にアピールし常設展示の結びとする。</p>
<p>3-2 21世紀の平和創造・沖縄の可能性 — プロセス展示及びその他の方法による展示</p>	<p>常に平和を目指し、行動し、創造のエネルギーを持つ人々の総意と創意から平和は生まれる。 新資料館では、21世紀の平和創造・沖縄の可能性を県民や来館者とともに平和を目指し、行動し、創造していく展示手法を導入する。</p>
<p>プロセス展示</p>	<p>21世紀の平和創造で、沖縄で何ができるのかを県民や来館者とともに考えていくのが、このプロセス展示である。 県民や来館者の積極的な参加を募り、新資料館のスタッフと共同で展示を創り上げていくという方式の展示である。ここでは、出来上がった展示ではなく、テーマの設定から議論、結論までのプロセス全体を展示する。 たとえば、基地返還後の地域づくりや自然保護のあり方といったテーマを新資料館のスタッフと県民が、議論しながらも考え、その成果を逐次、展示や情報メディアで公開するという方式で進行する。 テーマについて、異なる考え方を並列的に提示して、県民や来館者に意見を求めたり、課題を明確化して、その問題解決のアイデアを求めるなど、共生の姿勢で、対話を繰り返すなかから県民や来館者が、意欲的に参加できる道を開くとともに、意見やアイデアへのフィードバックを重視し、平和創造への新しい可能性を発見、創造していけるようにする。</p>

参加型の展示	新資料館が、戦争のプロセス、平和や構造的暴力をテーマにしたプログラムを準備し、県民や来館者がそれに参加することにより、平和についての可能性、創造性等を発見していけるようにする展示である。 たとえば、平和創造に貢献した偉人達の生きざまを、インタラクティブな展示装置で紹介したり、ゲーム感覚で、来館者の平和創造への意思を問うていくといった展示である。
子ども対象の展示	子どもを対象とした「子どもの平和展示コーナー」を設ける。ここでは、戦争や平和に関する世界の絵本や童話を集めるなど、親子で戦争と平和を語り合う場とする。
直感的、感性的な展示	若者や子どもたちを意識した場合、直感的、感性的なアプローチから、平和への心を養うという視点も重要である。 若者や子どもたちが戦争の恐ろしさや生命の尊さを絵画や彫刻、詩、音楽などの芸術作品を通して考えていく展示を検討する。
3-3 企画展示	戦争や平和に関わる問題のなかで常設展示やプロセス展示で取り上げられていないテーマ、より専門的な内容の展示、また研究活動の成果をいち早く発表・公開する展示として企画展示を実施する。 また、他の平和資料館や平和団体が企画した展示の受け入れや、慰霊の日など、特別な日にちなんだ企画展示を実施する。
エピローグ	常設展示、プロセス展示、企画展示を通して戦争と平和、平和の創造というテーマを前に、自分自身の内面と向き合ってきた来館者の心を、再び、明るい太陽の降り注ぐ、沖縄の自然の風景のなかに解き放っていきたいと考える。常設展示のプロローグでは、「沖縄のこころ」を、海に象徴させて展示への導入としたが、すべての展示を見たあとで、再び、海の優しさや豊かさを感じることもできるような空間演出を工夫する。

出典：沖縄県知事公室『平和祈念資料館移転改築基本構想』1995年11月

極的な参加を募り、新資料館のスタッフと共同で展示を創り上げていくという方式の「プロセス展示、および平和についての子供展示が構想されていた。ここでは当然、学芸員等専門職員の配置が前提となっている。また、このほかの事業活動では、沖縄戦と米国統治時代に関する資料収集、保存の拠点と言う、歴史博物館的な活動のほか、体験者の証言や広く平和運動の記録のデータベース化（平和運動、平和研究、平和学習の活用環境の整備）、語り部活動・平和ガイド育成、平和に関する講座講演、平和学習支援、平和イベント、人材育成、平和問題ライブラリー、平和意識調査、諸活動を支える研究体制など幅広く積極的な平和創造活動が期待されていた。

## 2 基本計画と展示業者の計画部会

基本構想が公表される直前の一九九五年一〇月、基本計画検討委員会が発足した。検討委員会は、佐久川政一（沖縄大学教授）を委員長とし、翌年四月まで八回の検討委員会を重ね、基本計画書を知事に答申、翌月の一九九六年五月、「平和祈念資料館移転改築基本計画」が公表された。<sup>24</sup>  
同検討委員会の会議録は未見のため（公開されていない）会議内容は明らかではないが、基本構想策定段階からこの新資料館建設に関与した乃村工芸社の資料によれば、基本計画の実質的な立案作業は、乃村が組織した展示計画立案ワーキング・グループ（専門研究者と乃村社員の協同）が行い、検討委員会は、これを監修的立場からまとめていったのではないかと思われる。

同ワーキング・グループは、安仁屋政昭（沖縄国際大学教授、歴史学）、旧資料館の展示再構築時の総合プロデューサー中山良彦らを中心とする計画部会をトップに置き、その下に、展示部会、展示部会戦後編、アクティブ部会の三部会をおいた。展示部会は、軍事史家藤原彰（一橋大学教授）・基地問題研究家の前田哲男（東京国際大学教授）などもメンバー

であり、計画部会に対し専門的知識の提供、レクチャーを行った。戦後部会には、宮城悦二郎、保坂廣志ら沖繩戦、沖繩戦後研究の専門家（共に琉球大学教授）が加わっている。アクティブ部会は、資料館の施設や事業活動を検討する部会として設置された。親委員会の計画部会は、基本計画検討委員会が立ち上がる前の一九九五年八月に設置され、基本計画の具体化作業を行っていった。各部会の開催状況は、展示部会五回、展示部会戦後編五回、アクティブ部会二回であり、計画部会が主導した<sup>(25)</sup>。

ワーキング・グループの討議内容を見ると、第二回計画部会（八月八日）では、早くもガマ再現構想が議論され、資料館から海を臨む計画も登場している。建築コンペの前提としての施設計画も同時に乃村が進めていたのである。事業計画については平和ガイド、地域研究、平和教育の方法論開発などが議題になり、開発教育・人権教育・環境教育の方法論に関し専門家を招いて検討された。

展示ストーリーにおいては、「ねらいは戦争の告発であり、戦争の残酷性を示すこと」、また、構造的暴力に注目など『基本構想』の提言をふまえて、沖繩アイデンティティ・文化への注目なども打ち出している。平和のプロセス展示では、平和維持への無力感を取り除くこと、アジア太平洋への視野の広がりを重視した。コザの街角（米軍基地の街の象徴）の再現案もこの第二回計画部会で提案されている。

第四回計画部会（九月一五日）では、アジアから見た十五年戦争につき、アジアの平和博物館の企画による日本の加害の告発構想が提起されている（資料館のテーマ企画展として）。アジア諸国との対話と和解の契機をつくることねらいであった。第四展示室（構造的暴力）のコンセプトとして、「核の時代Ⅱ」核開発競争、原爆投下、沖繩の核が注目され、全体としての構造的暴力展示に関するイメージが検討されている。第六回計画部会では、ガマで表現できない沖繩戦の諸問題をどう展示表

現するかが議論され、外にプロセス展示を中心にワークショップの導入、NGOとの協力が検討された。

第七回計画部会では、現在の基地問題とつなげる視点、基地問題ととらえ占領期とその後をつなぐ、という提案が行われている。

展示部会では、藤原彰の、日本軍人としての沖繩兵という側面へも視野を広げるべきという提言、前田哲男のサンフランシスコ条約はアジアへの戦争責任と沖繩の同時切り捨て、という指摘などが注目される。

展示部会戦後編では占領期中心か、基地問題か、という展示の基本領域にかかわる問題、復帰運動の意味、人権・平和運動への視線、文化への注目などが議論されているが、特に監修委員会までつながる重要な視点として、「民衆の生活に密着した視点」について、基地問題を底流にした民衆の生活を前提としつつも、その苦しい生活の中でも平和を求めてきた人々の暮らし、基地戦略に押しつぶされる民衆ではなく、主体的な生きた証を見いだしていこうとする民衆への視線が注目される。このほか、必要な情報発信の内容（自衛隊情報、航空機事故等）、沖繩の空・爆音・ゲリラ戦演習場等沖繩の戦後の特色を演出する手法、より根本的な所では、復帰運動を時期区分論的にどう捉えるか、日米共同演習体制下の自衛隊をどう捉えるか、など重要な論点が提起された。

なお、同ワーキングのメンバーは、既に基本構想策定段階で、大阪国際平和センター・広島市平和祈念資料館・立命館大学国際平和ミュージアム・韓国の独立記念館や戦争博物館の調査を行っていたが、計画部会設置後も、埼玉、川崎、堺などの類似資料館調査を行い展示の視点や展示の技法などを調査している。

基本計画は、こうしたワーキング・グループの検討に下支えされ策定された。

展示の全体像の大枠は、表2の通りである。常設展示は、基本構想段階では沖繩戦への道と沖繩戦・占領期から復帰後・構造的暴力などを考

表2 基本計画における展示の全体像

		プロローグ	
(1)メイン展示	①常設展示 —沖繩の歴史的体験—	1. 沖繩戦への道	近代沖繩
			15年戦争とアジア・太平洋
			アジア・太平洋諸国の眼からみた15年戦争
			太平洋戦争の概況
		2. 沖繩戦と住民	沖繩戦の前夜
			沖繩戦の経緯
			沖繩戦の実相
			証言の部屋
			沖繩戦の終結
	3. 太平洋の要石・沖繩	戦ヌ世からアメリカ世	
		怒りに燃える島	
		基地の中の沖繩	
		沖繩を返せ	
世替わりの渦の中で 主張するウチナー			
②プロセス展示 —今日と明日の平和を考える—	沖繩のこころを世界へ	平和問題を概観する場—世界の平和問題の総覧—	
		来館者とともに考える場—平和創造ワークショップ—	
		来館者が発言する場—展示と情報メディアによる平和会議—	
(2)子ども展示		子ども展示室	
(3)企画展示		企画展示室	
(4)野外展示		沖繩戦に関する大型実物展示	
		平和をテーマとした造形物	

出典：沖繩県知事公室『平和祈念資料館移転改築基本計画』1996年5月

える「沖繩のこころ」を世界へ、の三パートに分かれていたが、ほぼ前二者にくられ、「沖繩のこころを世界へ」の部分は、参加型で平和を創造するプロセス展示に統合された。戦後を、「太平洋の要石・沖繩」と言う形で、占領期だけでなく、基地被害・人権抑圧をはじめとする構造的暴力の視点も意識された展示として構想したとはいえ、基本構想段階と比較すればプロセス展示の役割が重くなったと言える。また、構想での沖繩戦の実相は、「沖繩戦と住民」という形で展示の視点がより明瞭に打ち出された。

また、野外展示が提案され、「沖繩戦に関する大型実物模型」、「平和をテーマとする造形物」を展示するものとした。

展示項目・細目についても(表1-2)、この基本計画の段階で、総合的かつ具体的な案が提起され、展示する事象も戦前と戦後では整理の方法が異なるものの、その後のたたき台が提案されていた。

沖繩戦への道は、天皇制国家に組み込まれるまでの日本化政策、兵役から始まる県民の国家政策への動員、国策の下での移民など、日本国家への県民の精神的・物理的動員が重視されている。アジアの資料館の企画展示構想は、基本計画に盛り込まれた。太平洋戦争の概況は、全体の戦況と太平洋での戦争の結果、沖繩県外で戦争に巻き込まれた沖繩県民に焦点を当てている。

沖繩戦と住民は、「沖繩戦の前夜」で、飛行場設営から始まる沖繩への部隊配備の影響と県民の役割動員、日米両軍の沖繩戦に対するねらいが、「沖繩戦の経緯」で沖繩周辺の航空作戦も視野に入れた沖繩島を中心とする戦闘の実相とその意味が問われ、「沖繩戦の実相」では、ガマと死の彷徨、その中で現れた「天皇の軍隊と住民」の極限的状况を描き出すことを意図している。さらに、沖繩戦の実相は、離島や北部の状況にもおよび、さらに、米軍の行動(ジャップ・ハンティングなど)、日本軍司令部と言う光の当て方も意図されている。また、展示のねらいに

表1-2 『基本構想』における「展示の構想」と「基本計画」における展示のねらい・項目・細目・事象

(1) 沖縄戦への道 近代日本にとっての沖縄の地政学的な意味を示すとともに、琉球処分から沖縄戦に巻き込まれるまでの経緯を科学的に検証する。その歴史の流れの中で、南進政策による沖縄の南洋移民の戦争犠牲についても明らかにするとともに、15年戦争での日本の加害とアジアの人々の痛みにも触れていく。	1-1 近代沖縄 国境画定政策としての琉球処分によって沖縄は近代天皇制国家に組み込まれた。それにもなつて、風俗改良運動、標準語励行、改姓改名運動など特別仕立ての皇民化政策が施行され、徴兵制と納税の義務を負わされたことを物語る。	(1)琉球処分と国境画定 行政機構の返還、日の丸、「蛍の光」にみる対外膨張政策、日清戦争等	(2)皇民化政策 教育の普及、教育勸諭と御真影、風俗改良運動、標準語励行、改姓改名運動、皇族の来県・皇室の慶事と植林など、公同会事件。※植民地「台湾・朝鮮・ミクロネシア・満州の皇民化政策」の手本となった。	
	1-2 15年戦争とアジア・太平洋 15年戦争が始まると、沖縄の島社会が、徐々に戦時体制に組み込まれていったことを物語る。また、侵略の犠牲となったアジア・太平洋諸国の人々の被害の実態を伝える。	(1)侵略戦争の始まり 戦争とシルークルー、沖縄振興15カ年計画、満州事変と満蒙開拓、日中戦争	(2)国策移民 南進国策と移民、拓南訓練所と満蒙開拓青少年義勇軍、大陸の花嫁等	(3)教育の軍事化 国民学校・青年学校・中等学校など、愛馬進軍歌、愛国行進曲等、皇紀2600年、われら少国民、国家神道と御獄、国民精神総動員運動等
		(4)戦後恐慌とソテツ地獄 第一次世界大戦（砂糖景気と成り金）、ソテツ地獄と沖縄救済運動等、移民と出稼ぎ（紡績小唄・南洋小唄）、無産運動（県道節）	(4)総動員体制 産業報国会、戦時標語と敵性語の排斥、時局批判の替え歌、大政翼賛会と隣組、戦時法制、徴用・勤労奉仕・女子挺身隊、増産・供出・配給等、情報一元化（新聞統制・ユタの弾圧・流言飛語の取締り）等	
		1-3 アジア・太平洋諸国の眼から見た15年戦争 アジア諸国や太平洋諸島の博物館・資料館に15年戦争に関する展示を企画して貰い、これを定期的に取り替えていくことを検討する。		
		1-4 太平洋戦争の概況 太平洋戦争が勃発し、太平洋の島々が日米の戦いの場となり、沖縄の南洋移民を含む多くの人々が戦争の犠牲になっていったことを物語る。	(1)太平洋戦争の戦況等 マレー半島コタバル上陸（8日）、真珠湾攻撃（8日）、グアム島（10日）、フィリピン、シンガポール、ジャワ、スマトラ、ニューギニア、ソロモン等、アジア・太平洋の資源と占領地行政・占領地住民の抵抗、ミッドウェー沖海戦（開戦の詔書を並べ）	(2)米軍の反撃と絶対国防圏 島嶼殲滅カエルとび作戦と沖縄移民の犠牲 ガダルカナル（軍神・大舩大尉につづけ）・マーシャル群島・トラック群島・マリアナ諸島・フィリピン・硫黄島
	(3)南洋諸島からの強制引揚げと船舶遭難 マーシャル・トラック・マリアナなど		(4)米軍の沖縄攻略作戦と沖縄守備軍 アイスバーグ作戦（対日攻略の拠点確保）と帝国陸海軍作戦計画大綱（国体護持のための捨て石作戦・本土決戦準備の時間かせぎの戦闘）の対比 第9師団の台湾転出・飛行場破壊 近衛文麿の上奏文（細川護貞「細川日記」）	
	(1)32軍の展開と全島要塞化・根こそぎ動員 飛行場設営・陣地構築、土地接収、老幼婦女子の動員・学徒の勤労動員		(2)疎開と戦時遭難船舶 台湾・南九州・北部・離島への住民疎開	
	(2)沖縄戦と住民 沖縄戦での地獄図を、民衆の視点で描き、その非人間的で残虐な実相を明らかにし、戦争の不条理と残酷さを訴えていく。 また強制連行された朝鮮人軍夫をはじめとする他国民まで巻き込んだ沖縄戦の全貌を明らかにするとともに、戦争で犠牲になるのは、常に民衆であることを教訓として伝えていく。	2-1 沖縄戦の前夜 サイパンが陥落し、米軍がいよいよ沖縄に迫ってくると、沖縄に配備された第32軍は、急ピッチで戦闘体制を整えていった。県民は兵役、飛行場や陣地構築等の役務に根こそぎ動員され、さらに食料・物資の供出を迫られるなど過酷な生活を強いられたことを物語る。	(3)10・10空襲と台湾沖航空戦 10・10空襲の全容（奄美諸島・大東諸島・沖縄地区・先島諸島） 台湾沖航空戦（10月12日～16日）と先島諸島への空襲 長勇参謀長の発言（細川護貞「細川日記」）	
			(4)米軍の沖縄攻略作戦と沖縄守備軍 アイスバーグ作戦（対日攻略の拠点確保）と帝国陸海軍作戦計画大綱（国体護持のための捨て石作戦・本土決戦準備の時間かせぎの戦闘）の対比 第9師団の台湾転出・飛行場破壊 近衛文麿の上奏文（細川護貞「細川日記」）	

2-2 沖縄戦の経緯 沖縄戦は九州や台湾をも巻き込んだ太平洋戦争末期の日米決戦であり、「国体護持・本土決戦準備の時間稼ぎの捨て石作戦」として展開された。その沖縄戦の性格と経緯を明らかにする。	(1)第10方面軍と32軍	台湾・南西諸島・九州を視野に入れた第10方面軍の守備範囲 兵団長会議における牛島司令官の訓示（44年8月：軍官民共生共死の一体化） 台湾・九州からの航空作戦（先島・奄美における航空戦も）、戦艦大和、英国艦隊の先島への艦砲射撃と空襲
	(2)上陸から本島南北分断まで	慶良間諸島上陸（集団自決の実相） 本島中部西海岸上陸→沖縄本島分断・北上・南下
	(3)日米激突の中部戦線	伊江島の軍民一体の戦闘・配送する宇土部隊と遊撃隊（北部戦線） 守備軍の8割を失った中部の戦闘（宜野湾・浦添・西原・首里・那覇の戦線）特に嘉数・前田・シュガーローフの激戦、首里攻防戦について 首里の拠点放棄（降伏勧告を拒否）→いわゆる戦略持久の実態 首里撤退時の牛島司令官の覚悟（沖縄の島の南の果て、尺寸の土地の存する限り）
	(4)南部戦線	米軍の掃討作戦（ガマの分布）
2-3 沖縄戦の実相 沖縄戦は住民を巻き込んだ国内唯一の地上戦であり、軍民が混在する中で激しい戦闘が繰り返され、さらに敵味方を問わない軍隊により住民は想像を絶する惨禍に遭遇することになった。こうした沖縄戦の実相を住民の視点から描き、戦争の悲惨さ、残酷さを訴える。	(1)ガマ	ガマの諸相（暗闇、死臭と糞尿、飢えと渴き、ウジ・シラミと同居、女性の生理）、軍民雑居、馬のり攻撃等
	(2)死の彷徨	逃げ惑う避難民、死の十字路、一家全滅、一家離散、消えた村、学徒の悲劇（鉄血勤皇隊、看護隊）、精神錯乱、発狂、餓死、ギーザバンタ（死の段崖）、国頭突破等
	(3)天皇の軍隊と住民	食料強奪、壕追い出し、幼児虐殺、スパイ視虐殺、自殺の強要、投降阻止、民間人に化けて逃げる兵隊、遺棄される障害者と傷病者、フンドシと白旗、真栄平の虐殺とアイヌ兵（壕強奪と敗走する日本兵）、地獄の野戦病院、青酸カリ処置、8・15以後もガマにこもる日本軍等
	(4)離島の状況	残置諜報部隊、波照間島の強制疎開（西表島南風見のマラリア地獄）、山中の赤松隊（8月まで）、久米島の虐殺 カッコ内の離島については、調査収集の後、取り扱いについて詳述する。（大東諸島、津堅島・久高島・平安座島・宮城島・伊計島・瀬底島・粟国島・渡名喜島、宮古群島、八重山群島、奄美諸島）
	(5)北部の戦闘状況と住民	山中にひそむ敗残兵と住民、迫撃砲で山を焼く米軍、御真影奉護隊、残置諜報部隊（第3護郷隊＝本部半島、第4護郷隊＝恩納・金武・久志）、住民避難地域に入り込む敗残兵、飢えとマラリアに苦しむ避難民、奄美経由で脱出した敗残兵（住民を徴発）等
	(6)ジャップ・ハンティング	バクナー司令官の死と報復、降伏ビラ、直接呼びかける降伏勧告・投降そして難民収容所へ（北部への移送）
	(7)司令官の命令	「牛島満軍司令官の最後の命令」と「大田実海軍司令官の電報」の対比
	(8)朝鮮人軍夫と慰安婦	虐待・虐殺される朝鮮人軍夫・強制連行された慰安婦（慰安所の実態）
2-4 証言の部屋 沖縄戦で何が起ったのか、想像を絶する戦場の極限状況を実際に体験した住民の証言を通して物語っている現資料館の証言展示を継承発展させていく。		

	<p>2-5 沖縄戦の終結 慶良間上陸後、米軍は、ニミッツ布告一号を公布して占領行政を宣言し、掃討作戦を続けながら、沖縄に本土決戦のための基地建設を強行した。熾烈な戦火をくり抜け、すべてを失った住民は、米軍の保護下、収容所の不自由な生活を余儀なくされたことを物語る。</p>	<p>(1)ニミッツ布告と占領行政 (2)本土決戦の拠点としての基地建設 (3)ポツダム宣言の受諾と日本の敗戦 (4)沖縄戦を振り返って</p>	<p>日本の立法・司法・行政の停止、占領行政の開始、日の丸君が代の禁止、捕虜収容所と難民収容所の開設（収容難民の北部移送・収容所の生活） 戦闘継続しながら、中南部地域を無人地帯にして基地を建設・本土攻撃の拠点 長崎に原爆を落としたB29は、伊江島で燃料を補給してテニアンに帰投した。 降伏使節団の往来（東京・伊江島・マニラ：河辺虎四郎参謀本部次長の一行）、マッカーサーは、厚木飛行場に進駐する前に、沖縄に立ち寄った。9月7日の降伏調印式（旧越來村森根＝現在の嘉手納飛行場内） 故郷への帰還と外地引き揚げ（1945年10月以降） 現資料館の「むすびの言葉」 「平和の礎」の解説と検索</p>
<p>(3)太平洋の要石・沖縄 沖縄は、15年戦争が終わっても、27年に及ぶ米国の軍事支配の下、朝鮮戦争やベトナム戦争等、常に世界の戦場と隣り合わせの生活を強いられるとともに、基地被害や人権抑圧をはじめとする構造的暴力にさらされてきた。その下での住民生活の実態を明らかにしていく一方、復帰運動をはじめとする平和を希求する県民の運動を物語り、沖縄の視座に立って今日の戦争と平和の問題を考えていく。</p>	<p>4-1 戦ヌ世からアメリカ世（1945～1951） 不自由な収容所を出た住民は、平和な沖縄の建設に向けて力強い息吹で故郷に復興の礎を築いていった。しかし、中華人民共和国の成立と朝鮮戦争の勃発し、それに伴い米国は、反共政策の一環で沖縄を冷戦体制に組み込み、沖縄の永久使用に向けた基地建設を急ピッチに進めた。対日講和の準備期ともいえる戦後草創期の沖縄を、軍政とのかかわりを中心に物語る。</p>	<p>○占領と行政分離 ○統治体制の確立 ○東西冷戦と沖縄基地 ○軍政下の生活再建</p>	<p>○統治機構 ニミッツ布告、行政分離宣言、無償配給から通貨経済へ、日本円と軍票、戦後初の議員選挙・市長選挙、民政府の時代、群島政府の時代、米国民政府、極東国際軍事裁判、対日講和をめぐる議論、天皇メッセージ、対日講和、日本の非軍事化と日米安保、臨時中央政府、布告と布令、連合国に占領された日本・米軍に占領された沖縄、琉球大学、琉球銀行、沖縄の地位をめぐる米國務省と軍部の意見、琉米文化会館 ○基地関係 冷戦の時代と沖縄、基地の街の形成、A・Jカンパニーと軍作業、恒久基地建設の始まり、中国革命、朝鮮戦争、土地接収と計画移民 ○民衆の動き・世相・生活・文化 収容所、故郷への帰還、外地引き揚げ、屋嘉節・二見情話とカンカラサンシン、混血児、戦災孤児と戦争未亡人、劇団、カバヤーと規格住宅、青松教室・馬小屋教室、ガリ版刷り教科書、6・3・3制、沖縄救援運動、密貿易・闇市・戦果、ギブミー、配給所、政党の結成、うるま新報、沖縄タイムス、KSAR、文教学校・外語学校、収骨作業と納骨堂の建立、不発弾、密漁、スクラップ・ブーム、婦女暴行と自警団、配給所の閉鎖と「みなと村」</p>
	<p>4-2 怒りに燃える島（1952～1957） 米国は、反共政策の一環として、日本を反共の防波堤と位置づけ、対日講和条約により沖縄を日本から分離し、軍事支配を開始し、沖縄を「太平洋の要石」として、極東最大の軍事基地へ変貌させていった。強制的な土地接収と民主的な諸運動への弾圧の中、住民自治としての琉球政府は発足したが、その権限は米国民政府の制限を受けており、住民の権利は圧迫されていた。県民の運動は、“島ぐるみ闘争”へと発展していった時代を物語る。</p>	<p>○見直される沖縄政策 ○太平洋の要石 ○島ぐるみ闘争と民衆</p>	<p>○統治機構 対日講和条約第三条と沖縄の地位、講和前補償、奄美の復帰、集成刑法、USCARと琉球政府、一括払いとプライス勧告、沖縄の無期限保有宣言、高等弁務官、岸アイク共同声明、労働三法、教育四法 ○基地関係 土地収用令、ナイキハーキュリーズ、基地建設ブーム、由美子ちゃん事件、思想調査・軍作業員の解雇、Aサインパーとオフリミッツ ○民衆の動き・世相・生活・文化 島ぐるみの闘い、四原則、朝日報道、人民党事件、民連ブーム、沖縄刑務所暴動、本土における沖縄返還運動、琉球放送（民放のスタート）、マルクスメデー、基地経済、米留学と金門クラブ、日留（国費自費）</p>

<p>4-3 基地の中の沖縄 (1958~1964)</p> <p>米国は、B円軍票からドルへと通貨を切り替え、沖縄支配を固定化する意図を鮮明にする。また、軍の基地強化・演習の激化は、事件・事故の頻発につながり、「基地の中の沖縄」の姿を浮き彫りにし、高等弁務官の専制的政治への反発は、主席公選要求運動へと具体化していった。これら運動を巻き起こしたエネルギーが、基本的諸権利の回復を求める祖国復帰運動へと発展していく姿を物語る。</p>	<p>○高等弁務官と専制政治 ○もりあがる復帰運動</p>	<p>○統治機構 ケネディ新政策、安保改定、ベトナム戦争と基地沖縄、ドル切替え、キャラウェイ旋風、裁判移送、天願事件、渡航拒否(補助申請)</p> <p>○基地関係 メースB、ナイキの発射演習、宮森小学校ジェット機墜落、国場君機殺事件、那覇港の放射能マグロ、原子力潜水艦(那覇港・ホワイトビーチ)</p> <p>○民衆の動き・世相・生活・文化 復帰協の結成、4・28沖縄デー、日の丸掲揚運動、海上集会、教育権分離返還論、安保と基地沖縄の論議、主席公選要求運動、砂糖自由化、島産品愛用運動</p>
<p>4-4 「沖縄を返せ」(1965~1971)</p> <p>ベトナム戦争の激化に伴い、沖縄が米軍の発進基地となる中、米軍機墜落事故、米兵による犯罪・事故が相次いだこと、毒ガス貯蔵の発覚などがあり、県民の抗議運動や反戦反基地闘争が渦巻いた。</p> <p>沖縄返還交渉が進められる中で、公選主席は誕生したが、米軍の軍事支配に対する鬱積した不満は、コザ騒動を引き起こし、県民の意に適合ぬ「返還協定」批准への反対デモとなって噴出する。騒然とした世相を背景に、住民が平和を希求した姿を物語る。</p>	<p>○一体化政策 ○ベトナム戦争の発進基地 ○不満を残したままの復帰</p>	<p>○統治機構 沖縄返還交渉と基地沖縄、復帰対策、一体化政策、対米請求権の放棄、佐藤ニクソン共同声明、沖縄返還と核疑惑、「日の丸」の規制廃止、初の国政参加選挙、沖縄対策庁と南進</p> <p>○基地関係 B52墜落、毒ガス移送、ベトナム北爆、ベトナム帰休兵と米兵事件</p> <p>○民衆の動き・世相・生活・文化 国連への訴え(二・一決議)、異民族支配への抵抗、ベトナム反戦運動、反戦・反基地の復帰闘争へ(核も基地もノー)、全国的な沖縄返還闘争、教公二法闘争から主席公選へ、コザ暴動、「いのちを守る県民共闘」、戦争体験記録運動と民衆意識、本土集団就職、オキナワロックとコザ、土地買占め(土地ころがし)、全軍労</p>
<p>4-5 世替わりの渦の中で (1972~1989)</p> <p>祖国復帰で、沖縄は日本国憲法下に入ったものの、米軍基地は再編強化され、基地被害は後をたたず、復帰の内実は県民の要求とはかけ離れたものであった。それに加え、自衛隊が配備された。</p> <p>復帰後、沖縄振興開発計画の下で、社会基盤の整備は進み県民生活は豊かになったが、反面、開発にともなう諸矛盾をも生み出したことを物語る。</p>	<p>○乱開発(公共投資・観光開発等) ○米軍基地再編強化と自衛隊 ○アメリカ世からヤマト世</p>	<p>○統治機構 沖縄開発庁と沖縄総合事務局、円切替え、沖縄特別国体、海洋博、革新県政から保守県政へ、海邦国体</p> <p>○基地関係 基地の再編強化、自衛隊の配備、自衛官募集、日米合同演習、ベトナム戦争の終結と基地沖縄の質的変化、基地周辺整備資金、「おもいやり予算」と基地、米ソ冷戦構造の崩壊</p> <p>○民衆の動き・世相・生活・文化 軍雇用員の解雇と全軍労スト、本土系列化の波、復帰の混乱と自己喪失、7・30交通方法の変更、軍用地料と土地連、反戦地主(一坪反戦地主も)、乱開発と環境破壊、ミバエ根絶、教科書裁判、世界のウチナンチュ大会、ウナイ・フェスティバル、1フィート運動、平和美術展、「日の丸」「君が代」強制に反対する運動</p>

	<p>4-6 主張するウチナー(1990～現在) 東西冷戦構造の崩壊による世界的な軍縮の流れに反して、沖縄の米軍基地は質的に強化され、湾岸戦争では出撃基地として使用された。日米安保の重圧と基地被害を抱えた県民が、基地の整理縮小など平和の配当を主張しはじめたことを訴えるとともに、「沖縄のこころ」をもとに、国際平和への貢献を模索しはじめたことを訴える。</p>	<p>○安保の拡大強化 ○平和行政の展開 ○アイデンティティの確立</p>	<p>○統治機構 革新県政の復活と県民の意識、軍用地転用計画と法律の制定 ○基地関係 湾岸戦争と基地沖縄、米軍の事件事故の頻発、空軍の特殊作戦部隊配備、安保の再定義と地位協定 ○民衆の動き・世相・生活・文化 嘉手納基地包囲行動、「琉球の風」ブーム、首里城復元、全国植樹祭、平和の礎、国際化時代(福州園・国際交流センターなど)、基地の整理縮小とアクション・プログラム、10・21県民総決起大会、軍用地強制使用の代行署名拒否、沖縄県知事を訴えた総理大臣、産業まつり・難島フェア、沖縄平和運動センター</p>
--	---	---	---

出典：沖縄県知事公室『平和祈念資料館移転改築基本計画』1996年5月

も掲げられている朝鮮人と慰安婦の問題が独立細目として提案された。証言の部屋は、主として沖縄島中部・南部に限定された証言を戦場全体に拡大展示することを目指した。

沖縄戦の終結は、六月二三日、あるいは八月一五日で切らずに、占領行政の開始や難民収容所の開設まで含み、明確な画期がなく戦後に移行する沖縄戦の終結の仕方を浮き彫りにし、さらに日本の敗戦時における沖縄の役割期待(米軍側の)を表すことも意図していた。

戦後は、統治機構・基地関係・民衆の動きなどの三側面から六期に時期区分した展示案である。上記三側面の三点目に、主体性や文化を意識した結果が伺える。六期の時期は、占領期をサンフランシスコ条約前、土地接収と島ぐるみ闘争期、復帰運動前期、復帰をめぐる緊張時期の四期に区分、その後を大きく、本土との一体化と基地問題の継続、アイデンティティーの明確化という指標で二期に区分した。<sup>(26)</sup>

### 3 沖縄国際平和研究所構想

新資料館の建設構想において、資料館の管理と資料館の展示を絶えず新たに更新していく保障となる研究部門は、どのように考えられていたのだろうか。

沖縄県では、一九九五年、「平和創造の杜」構想をまとめている。事業の柱は、平和の礎(追加刻名)、新平和祈念資料館建設、国際平和研究所設置、第三二軍司令部壕の保全公開などであった。資料館建設と研究所構想をセットで構想していたわけである。<sup>(27)</sup>

この国際平和研究所基本計画については、一九九七年一〇月に「沖縄国際平和研究所(仮称)基本計画検討委員会」(会長…東江康治名桜大文学長)が発足し、三回の検討委員会と、その下での六回の専門委員会での検討をへて、一九九八年五月にまとめられた。<sup>(28)</sup>

同基本計画によれば、研究所の研究領域は、戦争・基地問題をはじめ

とする構造的暴力全般にわたるアジアの研究者との協同を意図したものであった。詳細は以下の通りである。

① 沖縄戦を中心とする「アジア・太平洋戦争」の歴史・戦争の研究  
「特に、アジア諸国との地理的近接性という沖縄の特性を活かし、これら諸国の研究者との間で「アジア・太平洋戦争」の歴史・戦争の研究を双方向から共同で進めていくことは、極めて大きな意義を有している。」

② 沖縄県における「構造的暴力」に関する実践的研究

沖縄では米軍基地の活動で日常的に「平和的生存権」が脅かされている。沖縄には「日米地位協定」など、県民の意向を無視した形でなされた国家間の取り決めにより、背負わされた「人権侵害」の現実がある。「構造的暴力」はそれだけに終わるものではなく、「性差の問題」「環境問題」「経済格差」など、かなり広範囲にまたがっている。

③ 米軍基地問題の解決並びにアジア地域における平和・共生を確保・構築していくための実践的研究

沖縄の米軍基地から派生する諸問題は、アジア諸地域に共通した問題である。研究所が、沖縄県におけるこれらの問題を研究し、その成果を情報発信していくことは、沖縄県だけでなく、日本およびアジア地域における平和・共生に関する問題解決に寄与することである。

④ 沖縄県における経済的自立に関する実践的研究

真の平和は、経済的自立がなければ達成できない。沖縄の経済的自立は、世界、とりわけアジア諸国との密接な関連性において展望される。

⑤ 沖縄県の地域特性に立脚した、芸術・文化並びに自然科学の分野からの平和研究

文学や芸能をはじめとする芸術・文化の領域は、人間の生きかた、価値観や世界観が表現されており、平和研究とは決して無縁ではない。

研究所規模としては、完成段階で一五〇二一人の研究員を構想しており、実践的研究、アジアの抱える問題の強い意識、そこから見える研究の普遍性への展望とアクティブな知的貢献を企図していることが明瞭である。

また、国際平和研究所は、財団法人とし、平和の礎と平和祈念資料館を、同研究所で一体的管理運営する方針であった。<sup>(29)</sup>

しかし、この国際平和研究所構想は、一九九八年末に新発足した稲嶺県政により計画撤回となった。<sup>(30)</sup> この結果、平和事業を県から相対的に自立させつつ、アクティブに展開する要が失われ、平和資料館の展示や活動内容を研究方面、アジアの研究者との協同において見直しを続けていく機関がなくなってしまった。国際平和研究所設立計画は、積極的な平和の創出、沖縄の自立、アジアへの熱いまなざしが特徴であったが、資料館展示改竄問題で顕現した稲嶺県政の国益論的立場とは相容れなかったと思われる。しかし、この計画が前提となれば、その後の資料館の展示監修内容への、県行政の直接的（非公然的）介入が避けられたのではないかと考えると、研究所計画消滅の影響は予想以上に大きかったのかもしれない。また、資料館設立後、絶えず新しい研究、問題意識によって資料館の展示内容を更新する後ろ盾も大きく縮小したと考えざるを得ない。

#### 4 資料館の建築コンセプト

資料館の建築設計は、一九九六年に、「設計プロポーザル・エスキス競技」と言うユニークな方式で選定され、最優秀作品を元に建設が進められた。その経緯と資料館の建築に込められたコンセプトや技術的工夫、

建設素材の吟味などは、『沖縄建設新聞』の一九九九年二月一七日から同年一〇月二七日までの三二回に渉る長期連載から詳細を知ることができる。

資料館の建物を外側から見ると、沖縄の集落をイメージした一三〇ものそれぞれ形状の異なる赤瓦の屋根からなっていることが特徴である。この発想はどこから生まれたか。連載では次のようにして回想されている。

「設計もコンペ当初から『平和を形にすること』がこの建物の設計コンセプトだった。沖縄戦の展示をする資料館であるが、建物の外観や内部空間の中に『平和』を感じさせることを念頭に設計を進めてきた。かつての沖縄の集落の風景を感じさせる赤瓦屋根の外観は、沖縄の風土と景観との調和を示しながらも、人々の心に沖縄特有のおおらかさや平和を大切にしたい伝統や歴史を感じさせるものとした。それと対比的に内部空間はガラスやステンレスや石材を多用し、列柱と高い吹き抜けをもち湾曲した長い白いホールや、摩文仁の丘や平和の礎、そして沖縄の青い海を眺望できる展望塔は子供達に『夢や未来』を感じさせる『二十世紀の新しい空間』が用意されている」(連載二二回目)。

また平和の礎との関係も強く意識されている。「何よりも大切なことは、二十三万余の人々の名前が記された平和の礎の横にあつて、『建物自体が自己主張することなく自然に存在すること』がこの建物に課された最重要事項であった。」具体的には、一万平方メートルを超える建物を小さく見せ、懐かしく且つ沖縄の自然にだけ込み、建物の存在を和らげる工夫が求められた。このため、一三〇もの屋根から構成される集落イメージを出したが、屋根の大きさ、勾配、形状、シーサーなどの飾りまで伝統的な赤瓦葺の手法を基本として様々な工夫がなされたと言う。また「屋根の高さを変え、折り重なるように配置し色々な見え方がするように計画された。こうして「一軒一軒の異

なる顔をもつ住宅の屋根が集まった集落が平和の礎を取り囲むような風景をつくった」(連載一六回目)。

また、「伝統的手法を踏まえながらも赤瓦の新しい使い方を考え出すことは、沖縄の建築が街の存在をアピールし、伝統も受け継ぐことになる」というメッセージも込められていたと言う。

資料館は、二階の非常に重いテーマの常設展示を見終わると突然のように、海が目の前に開ける場に出る。そのねらいは、まさに沖縄の「自然」の「展示」であった。

「海と礎の回廊」は、沖縄戦の前夜から復帰までの沖縄の実情と戦争の悲惨さを訴える重く暗い沖縄の歴史を見終り、沈んだ見学者の心を癒す目的で設けられた。建物の東端にあり、大きなガラス張りのこの部屋からは沖縄の青い海と空が眺められる。薄暗く重い雰囲気常設展示の空間と、正反対の明るい水平線を望める空間への一瞬の移り変わりにすべての人が驚き感動するだろう。この部屋には長イス以外にはほとんど何も無い。展示物は、眼下に見える断崖とそこに打ち寄せられる白波。そして青く深く無限に広がる太平洋の海と円弧を描く水平線、その他はすべて空だ。目の前は豊かで平和な沖縄の自然を「展示」し、五十余年前、同じこの地で起きた沖縄戦の記憶をかさねることがこの展望室のねらいである。」(連載二七回目)。

## 5 八重山平和祈念館の基本理念・基本計画

八重山平和祈念館基本計画は、一九九八年一月、基本計画検討委員会(会長・石原昌家沖縄国際大学教授)が発足し、五月に基本方針、展示方針が公表された。

基本方針は、①一五年戦争に起因する「沖縄戦」と「戦争マラリア」の実相を正しく伝える、②「人権」について、その普遍的な価値を地域および世界にむけてアピールする、③常設展示を行うほか、平和に関する

表3 八重山平和祈念館の展示ストーリー

展示テーマ	展示項目	ストーリー展開の骨子
1 戦争マラリア	15年戦争に起因する沖縄戦	満州事変と軍部の台頭
		大東亜共栄圏
		沖縄戦の突入過程
	沖縄戦と八重山	戦前の八重山地域
		戦争に巻き込まれる八重山
		八重山に駐屯した軍隊
	八重山守備隊と強制退去	マラリア有病地域への強制退去命令の理由
		有病地域に関する住民・軍の認識
		島々の強制退去と残置工作員
	戦争マラリアの悲劇	軍隊の権力と踏みじられた人権
		飢えとマラリア
		公衆衛生の欠落・医師と薬剤不足
相次ぐ死亡者と野ざらしの遺体		
八重山の戦争終結と居住地帰還		
2 マラリア根絶	戦後のマラリア	戦後続くマラリアと根絶への動き
	医療的見地	戦前のマラリア
	マラリアという病気	マラリアの病理学的紹介
	マラリア根絶に向かって	特効薬の開発、普及
	八重山のマラリア根絶	マラリア根絶の達成
3 平和発信拠点	戦争マラリア援護会の活動展開	援護会の発足とその活動
	八重山地域における平和発信拠点を目指して	写真パネル等での訴え
	世界の恒久平和実現へ	祈念館の理念・事業
	世界のマラリア根絶	世界のマラリア汚染地域図

出典：石堂徳一「八重山平和祈念館建設の経緯」(『歴史と実践』第20号)より作成

る特別企画展を開催し、平和思想の普及を図る、④地域の視点から平和問題を訴えることにより、国際的な平和・友好交流を果たし、世界の恒久平和実現に寄与する、⑤現在も世界各地で蔓延する「マラリア」に対して、情報発信、交流事業を通じて、その根絶に寄与する、の五点である。

具体的な展示計画は、表3のように①戦争マラリアと②マラリア根絶、③平和発信の三つに分かれ、①は戦前の八重山、八重山に駐屯した軍隊の性格・作戦任務、守備隊によるマラリア有病地域への強制退去命令、そこで起こった悲劇から居住地帰還までが対象となる、この資料館のメイン部分である。②では八重山のマラリアをより広く扱い、一九六二年のマラリア根絶までの活動を示す。③は沖縄戦強制疎開マラリア犠牲者援護会の発足と活動、慰謝事業の実現までの過程を追い、最後に八重山から世界への、平和とマラリア根絶へのメッセージをかける、と言う内容であった。

### ③ 監修委員会

#### 1 基本計画展示案と監修委員会展示案

一九九六年九月二六日、同年五月の平和祈念資料館移転改築基本計画の発表を受けて、第一回「沖縄県平和祈念資料館(仮称)監修委員会」全体会議が開催された。監修委員会は「沖縄戦への道・沖縄戦」(部会長・星雅彦(著述業)、委員として新城俊昭陽明高校教諭、大城将保県立博物館長、本村つるひめゆり同窓会副会長)、「戦後沖縄」(部会長宮城悦二郎県立公文書館長、委員としてウイリアム・ランドール沖縄国際大学教授、内海恵美子雇用開発推進機構部長)、「平和発信・平和学習」(部会長…石原昌家沖縄国際大学教授、委員として安里英子(著述業)、

翁長健治琉球大学教授、翁長自修琉球大学教授、宿輪哲也県立芸大教授、村上呂里琉球大学助教授)の三部会からなった。

監修委員会は、以後二〇〇〇年三月三十一日まで三二回にわたり開催され、各部会もそれに応じて開催された。監修委員会は、一九九九年三月まででほぼ展示の細目、候補となる資料例をまとめる作業を完了し、以後展示物の作成、キャプションなどの作成・監修業務に入る予定であったが、この段階で、監修委員会に無断での展示改竄がはじまり、監修作業はこの事件が発覚するまで約四ヶ月間、完全にストップした。しかし、この展示改竄問題が世論や県議会の注目を浴びたため、改竄への批判が大きな高まりを示した一九九九年九月、監修委員会の議事録が公表されることになった。この改竄問題で本来的に公表されるべきは、改竄過程を示す資料であり、この過程から無視された監修委員会の議事録公開は筋違いというほかないが、お陰で、七回分の監修委員会全体会の議事録、一二回分の「沖縄戦への道・沖縄戦」部会議事録、七回分の「戦後沖縄部会」議事録、九回分の「平和発信・平和学習部会」議事録(何れも九月半ばまでの議事録のすべて)、および監修委員会や県三役への説明に使われた展示説明資料五点が沖縄県庁行政情報センターで公開されるようになり、監修委員会内の議論や問題意識をさぐる事が可能となった(ただし、その後六ヶ月分の議事録は、開示請求を行わないと見ることができない)。このような経緯を踏まえ、本節では先ず改竄問題が起こるまでの監修委員会の展示案を一応の展示監修の到達点として考え、検討を行う。

この時期までの監修委員会は、業者(乃村工藝社)の展示案説明と監修委員の意見提出という形で行われ、県職員は監修委員会において内容に関わる意見はそれほど述べていない。乃村はこの時期も、プレイン的な専門研究者を有していたようであり、この乃村側の提案説明とそれに対する監修委員の提言を会議毎に積み上げながら、監修委員会の展示案

がまとめられていった。

表4は、歴史的体験に関する常設展示部分についての基本計画と一九九九年三月段階での監修委員会展示案を比較したものであり(厳密にはこのレベルの展示案は、一九九七年中には完了し、その後、詳細設計の段階に入っている)、後掲表7も参照しつつ、両者のいくつかの差異を見ておこう。

第一は、プロローグの扱いである。この段階での監修委員会案では、「沖縄のころ」を海にだぶらせた基本構想・基本計画での全体的位置付けの中でのプロローグと言うより、近代沖縄の原風景を示す点に役割が移っている。

第二に、近代沖縄の項では、まず、近代日本の領土拡大過程を明示した。踏み込んで考えれば、琉球処分の延長上に対外的領土の拡大が続いていく様を描き出していると想定される。皇民化政策は、同化政策に変えられているが、明治・大正期の近代国家の同化政策と戦時総動員期における皇民化政策を分けてとらえた結果である。兵役と納税は、「沖縄戦への道」という観点から軍隊に焦点を絞り、沖縄の徴兵制の特質、日本軍の沖縄県人観をクローズアップしている。

第三に、一五年戦争とアジア・太平洋戦争の項は、国策移民の内容の充実が印象的である。基本計画で独立細目であった教育の軍事化・総動員体制は、監修案では、沖縄戦の前夜の項での根こそぎ動員の中で扱われている。教育の軍事化の成果が、この場面以降に集中的に発揮され、沖縄での戦時総動員体制が文字通り本格化していく時期で扱うと言うくらいであると思われるが、沖縄における一九四〇年前後の動員・翼賛体制成立の意味は展示の場面ではやや曖昧化したのではないかと思われる。基本計画の第3項アジア・太平洋諸国の眼から見た一五年戦争は、監修案では、外国の教科書に見る日本の侵略とカメラがとらえた日本の加害と言う常設展示部分と当初からの構想であったアジア諸国の平和博物

表4 基本計画と監修委員会展示案 出典：沖縄県知事公室「平和祈念資料館移転計画基本計画」1996年5月、『沖縄県平和祈念資料館（仮称）展示概要説明書』1999年3月23日

基本計画			監修委員会展示案			
展示テーマ	展示項目	展示細目	展示テーマ	展示項目	展示細目	
1. プロローグ			1. 沖縄戦への道	(1)近代沖縄	①プロローグ	
2. 沖縄戦への道	(1)近代沖縄	①琉球処分と国境画定			②琉球処分と国境画定	
		②皇民化政策			③近代日本の領土拡大	
		③兵役と納税の義務			④日本への同化政策	
		④戦後恐慌とソテツ地獄			⑤軍隊と沖縄	
(2)15年戦争とアジア・太平洋戦争		①侵略戦争の始まり		(2)15年戦争とアジア・太平洋戦争	⑥戦後恐慌と沖縄	
		②国策移民			①15年戦争の展開	
		③教育の軍事化			②国策移民	
		④総動員体制			③アジア・太平洋諸国の眼から見た15年戦争	
(3)アジア・太平洋諸国の眼から見た15年戦争			(3)太平洋戦争の概況	④テーマ企画展示		
(4)太平洋戦争の概況	①太平洋戦線の戦況	①太平洋戦争の概況と米軍の反撃				
	②米軍の反撃と絶対国防圏	②日米戦閣下での沖縄移民・現地住民の犠牲				
	③南洋諸島からの強制引揚と船舶遭難					
3. 沖縄戦と住民	(1)沖縄戦の前夜	①32軍の展開と全島要塞化・根こそぎ動員		(4)沖縄戦の前夜	①32軍の展開と根こそぎ動員	
		②疎開と戦時遭難船舶			②疎開と戦時遭難船舶	
		③10・10空襲と台湾沖航空戦			③10・10空襲	
		④米軍の沖縄攻略作戦と沖縄守備軍			④10・10空襲以降	
(2)沖縄戦の経緯		①第10方面軍と第32軍		ニュートラルゾーン1	⑤沖縄戦前夜	
		②上陸から本島南北分断まで			①本土決戦準備の捨石作戦	
		③日米激突の中部戦線			②日米の装備と作戦	
		④南部戦線			③本土での地上決戦準備	
(3)沖縄戦の実相		①ガマ	2. 沖縄戦と住民	(1)沖縄戦の経緯	①鉄の暴風	
		②死の彷徨			②沖縄戦の戦闘経緯	
		③天皇の軍隊と住民			③沖縄戦の住民犠牲の諸相	
		④離島の状況			④遺品が語る戦場	
		⑤北部の戦闘状況と住民			①牛島司令官の最後の命令	
		⑥ジャップ・ハンティング			(2)沖縄戦の実相	①死の彷徨
		⑦司令官の命令				②ガマでの惨劇
		⑧朝鮮人軍夫と慰安婦			③水が入ったままの水筒	
(4)証言の部屋			ニュートラルゾーン2	①沖縄戦の犠牲者		
(5)沖縄戦の終結		①ニミッツ布告と占領行政		(2)証言の部屋	①住民の沖縄戦証言集	
		②本土決戦対日戦の拠点としての基地建設			②住民の沖縄戦証言映像	
		③ボツダム宣言の受諾と日本の敗戦			①沖縄戦の教訓	
		④沖縄戦を振り返って				
4. 太平洋の要石・沖縄	(1)戦ヌ世からアメリカ世・沖縄	①占領と行政分離	4. 太平洋の要石・沖縄	(1)米軍占領下の沖縄住民	①沖縄占領	
		②統治体制の確立			②占領軍の政策	
		③東西冷戦と沖縄基地			③廃墟の中での生活再建	
		④軍政下の生活再建				
	(2)怒りに燃える島		①見直される沖縄政策		(2)アジア・太平洋の中の沖縄	①核の時代の始まり
			②太平洋の要石			②アジア・太平洋の情勢
			③島ぐるみ闘争と民衆			③キーストーン・オブ・ザ・パシフィック沖縄
	(3)基地の中の沖縄		①高等弁務官と専制政治		(3)基地の重圧と住民	①米国の沖縄支配
			②もりあがる復帰運動			②人権抑圧
			③一体化政策			③基地の街の生活
	(4)沖縄を返せ		①ベトナム戦争の発信基地		(4)燃え上がる復帰運動	④強化される基地
			②ベトナム戦争の発信基地			⑤基地に起因する事件・事故
③不満を残したままの復帰			⑥民衆の怒り			
(5)世替わりの渦の中で		①乱開発		(5)復帰した基地沖縄	①沖縄と本土の復帰運動	
		②米軍基地再編強化と自衛隊			②返還交渉の経緯	
		③アメリカ世からヤマトの世			①沖縄返還協定	
(6)主張するウチナー		①安保の拡大強化		(6)21世紀の平和創造と沖縄	②復帰で変わる沖縄	
		②平和行政の展開			①変貌を遂げる世界情勢	
		③アイデンティティーの確立			②今日の基地問題	
					③次代の平和創造を目指す沖縄	

館などで企画された展示の誘致と言う部分に拡大再編された提案となった。

太平洋戦争の概況の項は、基本計画に対し戦況と米軍反撃が統一的に整理され、沖縄移民の引揚の所では、現地住民の犠牲と言う視点が加わった。

第四に、沖縄戦の前夜は、「沖縄戦と住民」で扱うのではなく、文字通り前夜として「沖縄戦への道」の最終場面に位置づけた。かつ、この項は飛行場建設と三三軍の展開を契機に一挙に臨戦的根こそぎ動員態勢に入った沖縄の動員体制の特質を多方面から描き出そうとし、かつ後の軍による住民虐殺につながる伏線がきっちりとしかれている。慰安所設置の意味もこの脈絡の中におかれることにより明瞭になっている。ただし、朝鮮人軍夫の動員は、やや不明で、後の朝鮮人虐殺（戦闘経緯の中の住民虐殺の一部として、この問題が位置づけられている）につながる前提としての朝鮮人の動員はうまく描かれていないようだ。なお、一〇・一〇空襲以後の米軍上陸前夜にも光を当てたかったようだが、研究史が手薄なためか、想定された展示物は手薄である。

第五に、沖縄戦の経緯と実相は、基本計画に比べ、時間的な経緯、各地の戦闘経緯、砲撃の意味、住民犠牲から見た特質、軍隊と住民の関係が遥かに整理されて提出された。また、証言についても、新たに映像証言が位置づけられた。

第六に、ニュートラルゾーンの設定により、戦争の基本データや牛島司令官の命令など日本軍の戦争目的や責任を考える場合の基幹となる重要文書を他の資料に埋没させることなく効果的に提示しようとしていたことが見て取れる。「結びのことば」もニュートラルゾーン4に置かれることによって効果を高めようとしていた。

第七として、監修委員会での議論を通して（特に第三回委員会）、第一〜四室それぞれの展示のねらいにつき、第一室が、牧歌的な沖縄が戦

争に巻き込まれる過程、第二室で沖縄戦の全体像をしっかりと語り、第三室では、沖縄戦の典型的な場面を、地上のドラマ・地下のドラマ（地上の地獄・地下の地獄）として体験する場、第四室で個に立ち返って沖縄戦の証言から沖縄戦を考える、最後にニュートラルゾーン（結びのことば）で総括、と明確化され、各展示室のねらい・関連付けが整理された展示構想となった。

第八に、大きな差異は、沖縄戦展示と戦後展示との境界の移動である。基本計画では、最初の占領行政や難民収容所の設置は、戦時行政として位置づけられ、基地建设も本土決戦との関係で展示が構想されていた。原爆投下と沖縄との関係も、この敗戦への流れの中で展示構想が立てられており、戦争終結は九月七日の降伏調印式が最後の明瞭な指標となっていた。しかし、監修委員会案では、この時期は、以後二七年におよぶ米軍占領の開始期として位置づけられ、戦後展示の最初に置かれた。戦中と戦後が同時並行する沖縄戦終結の特質をどう展示として表現するかについては、沖縄戦部会と戦後部会との狭間にあつてさほど議論されたと思えないのだが、全体会議あるいは両部会合同での踏み込んだ討議が必要だったように思われる。占領行政の成立過程は明瞭に描き出せたが、沖縄戦終結の特質は展示としては薄らぎ、原爆投下や降伏使節団の展示も固有の居場所をなくしてしまった。

第九に、「太平洋の要石・沖縄」というテーマの戦後展示は、六期に時期区分された基本計画の展示構想に対し、沖縄の戦略的位置・そのための基地に起因する人権抑圧や基地に依存した生活・米軍支配への民衆の怒りと復帰運動・復帰後の沖縄などの大テーマでくくった問題別の展示となった。従って基地問題や基地の街での生活、復帰運動と返還協定など沖縄の戦後史の最重要問題に関してはとらえやすい展示となったが、その代償で、時期的な変化・時代像は分かりにくくなった。また、主張するウチナーとして一九九〇年代に積極化する沖縄からの平和発信や沖

縄アイデンティティー主張の動きも展示が分散したことでインパクトが弱くなったのではなからうか。

## 2 監修委員会での論点

監修委員会が常設展示について達成した成果と問題点については上記にまとめたが、以下では、監修委員会の各部会、全体会議での注目される論点を紹介し、「平和発信・平和学習部会」での議論の個所では、あわせて同部会がまとめたプロセス展示・子ども展示案を紹介しよう。

「沖縄戦への道・沖縄戦部会」の議論で注目される諸点は以下の通りである。

第一に、沖縄は、軍隊も基地もない「軍事的空白」とでも呼べるような特殊状況に置かれたために、他県と比べ学校以外での戦時意識の広がり・深化が遅れ、一九四〇年頃沖縄芝居の軍事劇化などようやく戦時意識の広がりを見せるという。合わせてこの時期からの南進政策の先兵としての沖縄県民の姿、海南島基地建設の主力としての沖縄人労働力という問題など、アジアへの加害につきこれまでさほど注目されて来なかった側面にも注意が喚起されている。この時期については筆者も小論をまとめたことがあるが、先にもふれたように、一九四〇年頃からの沖縄社会の急速な変化という問題意識は、結局のところ監修委員会の展示案にうまく活かされなかった。

第二に、飛行場建設を要として総動員体制確立を描く構想が重ねて議論され、これは監修委員会案に「沖縄戦の前夜」の柱として取り入れられた。

なお、沖縄の学徒隊の編成が、義勇兵役法制定に与えた影響など、沖縄戦が「本土決戦体制」構築に与えた影響が指摘されている。この点は、研究の現状に制約されたためであるが、展示には反映されていない。

第三に、沖縄戦の特質の一つを全面的に発動した特攻作戦ととらえ、

空だけでなく、海と陸上特攻をトータルに描き、かつ九州と台湾、中継地点としての八重山の飛行場をも視野にいれ、さらに特攻作戦を押し出すことでアメリカ軍の新兵器による戦争展開とを比較する構想が強調された。この発想は各部分でほとんど取り入れられているが、トータルとしてこのような戦争像が展示構想から伺えるかと言うとそうは言い切れない。

第四に、ガマの作成展示については余りにも生々しくもなく、かつリアリティーのある展示物を作る難しさから委員の間に否定的な意見も強かったが、五感を通して沖縄戦を考えるきっかけとして、さらに証言の部屋の資料的世界との複合効果を考え、ガマの展示構想をまとめていった。しかし、具体的なガマの設定をめぐっては、後に争点となる銃の持ち方・方向のほかに、時期設定、ガマで起こった様々な出来事などの部分を描くか、温度、音、臭い、材質感、生活用具、顔つき、動作、視線、人物（集団）構成、植栽、さらに暗い中でどのように、ことばによってリアリティーを失わないようなシーンの説明をするのか、などなど検討事項は山ほどあった。ある戦争の本質を象徴的に表す造形を作る難しさである。

第五は、写真や映像が残した視線の問題、すなわち映像資料に付随する限定的な性格と言う問題にかかわる論議である。戦場を彷徨した多くの戦争体験者が戦場に散らばり山をなす死体を目撃しているのだが、米軍カメラマンは死体の重なる様は意識的にとっていないと言う。従って、戦場の実相を示す最も重要な資料をなす米軍写真は、個々の犠牲者の姿は示せるものの、集団的に死体が並ぶ場面の展示物としては期待できないのである。似たような問題は一九四〇年頃の沖縄を写した民俗学者の仕事にも言える。民俗学者の視線は沖縄的な文化、生活に注がれており、他県と同様な場面は意識的に外され、沖縄風が誇張された可能性が高い。それは沖縄戦以前の沖縄を写した貴重な資料ではあるが、これも沖縄社

会の一般的姿を見せる展示物としては留意すべき限界があるのである。

次は「戦後沖繩部会」である。全体会議での論点との重複を避けて、この部会での固有の論点にしぼるが、第一に、大きな論点でありつづけたことの一つは、女性の姿をどう描くかと言う問題であった。沖繩戦での犠牲を反映して、沖繩戦後の人口構成は、年齢層だけでなく、男女比においても著しくアンバランスな構成となった。「戦後を生き延びることができたのは女性のお陰」と言うくらい、沖繩の女性たちはエネルギーギッシュに戦後の経済活動を担い、その姿は、女性オーナーが並ぶ平和通りのような沖繩独特の街並みを作り出した。しかし、一方で、基地・軍隊に起因する女性の性的被害や女性の売春も深刻であった。部会では、無国籍児童問題、売春防止法の適用についても問題提起されている。これらを踏まえ部会では、本表（第4表）にまとめた展示案に対しても、さらに女性の歩みに一項目を割いてまとめて展示する様に追加提案していたが、展示改竄をめぐるごたつきもあり、この要望は実現しなかった。その結果、先走って現行展示との関係で指摘しておく、市場の女性や基地被害、Aサインバーなど女性に関する展示はいくつかあるが、「女性の姿」を総合的にどう捉えるかと言う点は、展示から伝わりにくいものとなっている。

第二は米軍基地形成・拡大、あるいは基地の役割にかかわる議論である。基地問題の解決策としての移民政策という側面への注目（従って、八重山での戦後マラリア対策と基地問題との関係）、沖繩の基地形成と本土経済復興・本土のドル確保との関係、沖繩の地政学的捉え方への反論、高等弁務官資金に関する評価（占領の負の側面に対する正の側面と言うレベルの問題としてではなく、基地の維持に必要不可欠だった弁務官資金による宣撫工作、あるいは流米親善政策の役割）、ベトナム戦争への加担問題（軍作業を通じた米軍支援、沖繩基地内での韓国兵やベトナム・カンボジア兵の訓練、あるいはVOAの役割）など興味深い問題

が議論されているが、展示資料・裏付けの限界もあるためか、監修委員会の展示案でも一部を除き活かされていない。

また基地に関連して、沖繩への日米安保条約適用の意味、自衛隊配備・基地使用問題の展示が強く要望された。この点は、監修委員会展示案に一応反映されているが、問題の大きさに対し、展示案での扱いは小さく、開館後の戦後展示への批判にもつながっていく。

第三に、基地と占領に苦しみ続けた沖繩という側面だけではなく、沖繩の主体性・沖繩アイデンティティーの模索、沖繩の自立化につながる側面を展示上にどう表現するのか、という問題も絶えず大きな論点でありつづけた。この点は、たくましく生きる民衆の姿、沖繩芸能の復活、あるいは復帰時の幻の政府への建議書に描かれた沖繩自立化・基地問題解決構想などの形で提案され、監修委員会展示案の各所に反映している。ただし、戦後を一つの展示室（ただし実質二室分）で描くと言うスペース的な限界もあり、この主体的な側面の強調は、基地展示の縮小案とセットにならざるを得ず、一九九九年三月の沖繩戦戦後部会は、この時の展示案（先述のように厳密には一九九七年に完成した案）に対して基地が重すぎ民衆の主体性がうまく表現されていないとして、基地関係の縮小を提言することになった。

この結果は、展示改竄の動きとからみつつ、この監修委員会展示案で構想されていたAサインバー展示の大幅縮小（合わせて、バー内に入り交わされている会話を聞く展示のカット）、MPに通行証を見せ基地のフエンスの中に入る展示案の中止という形で現れている。

展示スペースの関係では、沖繩島以外の島での戦後を描く必要もあり（これも部会の要望で追加された）、展示構想のうえで広さの制約は無視できなかったと思われる。

次に、部会での議論を踏まえつつ、監修委員会全体会でも議論になった大きな論点にもふれておこう。

第一は、日本の加害やアジア・太平洋の人々の痛みを含む沖縄戦の展示、あるいは沖縄からの平和創造・発信という資料館の基本構想にかかわる問題である。例えば、戦争被害の側面が強調される沖縄移民であるが、現地の人々から見れば、加害者・支配者と言う性格ももっている。こうした例も含め、アジア・太平洋の人々が見ても納得できる展示をどう作るかと言う点が課題として意識された。この問題は、戦前・戦時の展示だけの事柄ではなく、「援護法の適用をめぐる謝罪しない日本の側に入ってしまったっている沖縄とアジアのわだかまりという現状にどう架橋できるのか」、戦傷病者戦没者遺族等援護法の適用という形での戦争の正当化によって沖縄とアジアの人々を隔てる壁が生まれている中で、アジアとの共生をどう展望できるのか、という戦後展示まで貫く課題であった。

第二は、基本構想が「沖縄の海」に象徴させようとした沖縄の豊かさを、展示全体の中でも効果的に打ち出す必要性に関する提起である。その場合の豊かさとは、自然、文化、生活、精神を含むが、例えば、豊かな沖縄がいびつな近代（近代日本の沖縄支配）のなかで壊され、沖縄戦に引き込まれていくと言う姿、また同化政策の中でもどっこい生きてきた沖縄的な文化・沖縄的な空間を見せることで、沖縄戦で失われたものは何だったか（失ったものの重さ）をより広い視野で示していく必要、さらに沖縄戦での被害から精神的に立ち直っていく背景（支え）としての沖縄の自然や精神文化の役割、沖縄社会の共同性と復興との関係（復興の支えとしてのユイマール）への注目、というような側面から豊かさが注目されている。もちろん、このような精神文化の豊かさを展示としてどう表現するかは極めて難しく、また、生活面での豊かさは、沖縄の人々には通じて、多くの観覧者には、「貧しさや遅れ」としか映らない恐れが強い。しかし、この提起は、展示の範囲を超えて、戦争の意味・復興・自立への展望を考えるうえで欠くことのできない視点だった

表5 子ども・プロセス展示室展示案と修正案

展示ゾーン	展示項目	資料項目	修正展示項目	修正資料項目
1. 気づく	1. プロローグ 「今、ここにある私の命、あなたの命」	(1)「今、ここにある私の命、あなたの・地球の命」	1. プロローグ 「生命の誕生」	(1)「今、ここにある私の命・あなたの・地球の命」
	2. 世界の命ドウ室・世界の18人の子ども達	同左	2. 世界の子どものくらしを知る・心にふれる	(1)世界の18人の子どもたち (2)子どものくらしを知る・心にふれる
	3. 子どものくらしを知る・心にふれる	同左		
	4. 子どもたちをとりまく社会を考える	(1)人権・差別 (2)貧困 (3)止まない戦争・紛争 (4)触まれる地球環境 (5)豊かさの中のひずみ	3. 私たちの世界をみつめる	(1)人権・差別について (2)貧困について (3)戦争・紛争について (4)地球環境について (5)豊かさについて
2. 理解する	1. スタジオ・ゆいまーる	(1)多目的スペース (ワークショップスタジオ)	1. スタジオ・ゆいまーる	(1)多目的スペース (ワークショップスタジオ)
	2. 平和活動に参加しよう	同左	2. 平和活動に参加しよう	同左
3. 感じる	1. イマジン ・クリエイティブガーデン	(1)モノを通して世界を知ろう	1. イマジン ・クリエイティブガーデン	(1)モノを通して世界を知ろう
		(2)本を通して世界を知ろう		(2)本を通して世界を知ろう
		(3)遊びを通して世界を知ろう		(3)遊びを通して世界を知ろう
		(4)ことばからイマジネーションをひろげよう		(4)ことばからイマジネーションをひろげよう
	2. キッズガーデン	(1)動物家族と遊ぼう	2. キッズガーデン	(1)動物家族と遊ぼう
		(2)探検しよう（地球は生きている）		(2)探検しよう（地球は生きている）

出典：『沖縄県平和祈念資料館(仮称)展示概要説明書』1999年3月23日, 1999年7月31日付「三役説明会」資料

と思われる。

### 3 子ども・プロセス展示室の展示案と部会での論点

監修委員会でもとめた子ども・プロセス展示案は表5の左列である。

基本計画での子ども展示から独立した平和の創造・発信、形態的にはワークシヨップなどを通じて来館者とともに平和を考えるプロセス展示的発想は、子ども展示の一角に納まった感がある。もちろん、平和発信・平和学習部会でも一〇歳程度を対象に想定した子ども展示とプロセス展示は区別して構想しているが、それでも、一般来館者ではなく、高校生程度を想定している。このため、最初の基本構想段階での構造的暴力に関する展示が縮小し、プロセス展示に一部統合されることとなり、さらに、この展示案がまとめられる段階で、プロセス展示が子ども展示と統合的に運営されることになったため、世界の平和問題の現状を概観したうえで、ともに平和創造を考究すると言う展示構想は、第一〜五の展示との関係が薄まり、一〇代の子ども展示として独立した形態となったのではないかと思われる。沖縄戦と戦後の展示を見た成人観覧者が、さらに世界の平和の現状を見て平和を考えていく場が縮小し、他方で、子ども展示は、それとして上記の常設展示とは独立的に機能することになった。

このような展示計画の変更による展示の性格の変化があったとはいえ、表に見るように、命や世界の子どもたちをとりまく、多様で、しかし厳しい環境に気づくところから入り、子どもをとりまく世界の構造的暴力を考えさせ、次いで共に考え、そしてさらに深く調べていく、という展示のあり方は、子ども対象の平和博物館展示が非常に少ない日本の現状にあつて、画期的な内容をもつものと言えよう。新平和資料館が行った先端的な展示実験であつた。

この展示構想に行き着くまでには、平和を考える入り口をどう用意す

るのか、その入り口で想定した命の大切さという場合、人間中心で考えるか、生命全体への広がりなのかで考えるのか、子ども展示とプロセス展示をどう区分するのか、など様々な議論が重ねられたが、注目されるのは、以下の二点である。

第一に、世界の子どもの日常生活から世界をとりまく社会問題に気づかせるべく「世界の一人の子ども」の取材を行うことにしたわけだが、実際に選定し、取材する段になると、国家の枠組みの中で選ぶという方法で良いのか、自立を展望する沖縄で子どもの展示をする時、国家を超えるつながりをも重視すべきではないのか（例えば、中国か、台湾か、台湾ならば漢族か、高山族か、など）、取材は誰がどのような視点で行うのか、子ども自身の視点は取り入れられないのか、取材対象の子どもはその地域社会や学校からどのような基準で選ぶのか、選び方によっては、展示された子どもを通して生活レベルの差が一覧のように現れ、逆に特定地域への偏見を生む可能性はないのか、しかし、それを避けるために、学校的価値を優先した平均的な子ども・その社会の中流的な子どもを選んだとして、それはこの資料館のねらい、展示としてふさわしいのか、などなど、難問が次々と現れた。

第二も上記の問題に関係するが、それぞれの社会がもつ「豊かさ」にどう注目するのか、できるのか、と言う点である。占領下の厳しい環境下でも、経済政策がないがしろにされた戦前沖縄社会においても、そこには固有の豊かさがあり、人々は苦しみばかりではなく、生き生きとした生活をおくっていたと言う、沖縄戦部会や戦後部会での議論と通じる視点に立って、現在の世界の子どもたちの生きる環境を見る上でも、「豊かさとは」「豊かな文化とは」、そして、アジアの社会での豊かさは、西欧諸国の基準とは違う形で、どう表現されるのか、などの問題が繰り返し議論された。

表6 展示修正の指示一覧

4月6日	1室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省検定教科書を基準とした展示用語・展示内容を目指すように。</li> <li>・各種の教科書を参考とすること。(例：十五年戦争は教科書用語として使われていない)</li> <li>・一室については、歴史観の確認が必要である。史実関係を明確に出す。</li> <li>・新しい研究結果も考慮に入れる。</li> <li>・沖縄は、日本の一県にすぎないので、日本全体の展示・記述について考えるように。</li> </ul>
	5室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基地に起因する事件事故より、県内における事件・事故が多かったことも念頭におく。</li> <li>・「Aサインバー」の黒人が人種差別につながるか。</li> <li>・国連(機構図)の安保の動きを取り上げること。</li> <li>・反安保の展示だけにならないように、安保の果たしてきた役割(アジアの平和維持等)を示す。</li> </ul>
	子ども・プロセス展示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「五つの社会問題」タイトルにマイナスイメージが含まれているので見直すこと。</li> <li>例：触まれる地球環境、豊かさのひずみ、止まない戦争・紛争</li> <li>・国連機関(ユニセフ、UNHC等)の平和維持活動を紹介すること。</li> </ul>
6月16日	1室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「対華二ヶ条の要求」を削除する。</li> <li>・植民地、占領地の皇民化で国策を批判することはどうか。</li> <li>・日本軍の沖縄人観の展示を削除する。</li> <li>・博愛記念碑を展示する必要性に疑問。</li> <li>・カメラが捉えた日本の加害を県の立場で展示するのはどうか。</li> <li>・「慰安所」の解説は、国の意見を考慮する。</li> <li>・スパイ取締りを常設展示で扱うことが必要かどうか疑問。「戦時体制」というくくりで再検討する。</li> </ul>
	2室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モニター出てくる字幕スーパーについて、注意してほしい。</li> </ul>
	5室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Aサインバーの動線を主導線からはずす。</li> <li>・活躍するウチナーンチュを削除する。「個人」が飛び出るのは県の施設としてふさわしくないのでは。かわりに「アイデンティティの復活」の内容をもっと多彩にしてはどうか。</li> <li>・「県民総決起大会」解説で、前知事の法廷での陳述文(準備書面が公開されている)は、抜かない。沖縄の歴史的陳述個所に、違うとの指摘がなされているところもあり、県内の統一見解がとられていない為。</li> </ul>
	ニュートラルゾーン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・展示内容を削除し、休憩スペースとするよう、検討する。</li> </ul>
	子ども・プロセス展示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「人権・差別について」の日本人のなかの人権差別問題(アイヌ・部落・在日・在日外国人・沖縄基地問題)を削除する。</li> <li>・「壇上ホール」は、スペースが狭いと思われる為、何も置かないほうが良い。</li> <li>・「五つの社会問題」で解説に使用するデータの典拠は明快にすること。国連やユニセフ、国、県で使用しているデータを使うことが望ましい。</li> <li>・キッズガーデンは、予想よりも実際面積が狭いこと、管理者の配備などの管理安全・運営上の問題と、予想される騒音面の問題を考慮し、現状の展開方法を改め検討する。</li> </ul>
	エントランス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建築外壁の「沖縄戦戦闘経緯地図」は中止。海と山をイメージしたデザイン面と、非核・平和沖縄県宣言文と現資料館のむすびの言葉を展示する面とで、構成する。</li> <li>・「不発弾」の魚雷展示は、野外展示が良い。</li> </ul>
7月9日	1室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「カメラが捉えた日本の加害」の削除。</li> </ul>
	2室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・壁画写真「鉄の暴風と形容された艦砲射撃」の変更→「雨水のたまった弁が岳周辺の弾痕」へ</li> </ul>
	3室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ガマでの惨劇」のスケッチの変更(三ヶ所)</li> <li>・「死の彷徨」の写真二点の変更</li> <li>・「集団自決と思われる写真」→「米軍の機銃掃射で墓に隠れていた住民が犠牲になった(ことを示す)写真」</li> <li>・「白旗をあげる少女」→「少年兵とおもわれる子どもの焼死体」</li> </ul>
	5室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Aサインバー」の展示面積の縮小</li> <li>・新規展示項目「国連」の設置と、その展示位置</li> <li>・「燃え上がる復帰運動」背景壁面で復帰運動に使われた「旗」類をたくさん実物展示するのは中止。</li> </ul>
	子ども・プロセス展示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・再検討のための平面図の作成指示。</li> </ul>

8月6日	1室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「同化政策」「国策移民」の用語について検討が必要。</li> <li>・「慰安所」解説は教科書での解説と同レベルで展開する。</li> <li>・アジア・太平洋諸国の「教科書展示」については了解。中国・韓国については展示するが、その他の国については調整。</li> <li>・アジアの住民犠牲について確認が必要。</li> <li>・南米・外国での沖縄県人についての扱いも必要。</li> <li>・「スパイ取締り」のパネルの名称を「戦時体制」へ変更、反戦運動と戦時体制を主展開した解説にする。</li> </ul>
	2室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「広島・長崎」(原爆)と「本土空襲」解説は、「住民犠牲の諸相」で吸収できないか、検討して欲しい。</li> </ul>
	4室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニュートラルゾーンの「むすびのこぼ」を新たに考えてはどうか。</li> </ul>
	5室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等弁務官治世時代には、マイナスもあったがプラスもあった。その点を項目にだしたい。</li> <li>・「キーストン・オブ・ザ・パシフィック沖縄」の造作表現を削除。米国の施策を解説するグラフィックスペースとする。</li> <li>・琉球政府ビルの花ブロックデザインを中止。行政機構の変遷を示すグラフィックスペースを変更する。</li> <li>・「国連」展示の決定。解説内容ではPKOについても扱いたい。最近の情勢をかんがみ、どう解説するか慎重に検討したい。</li> <li>・「沖縄ルネッサンス・アイデンティティの復活」では、首里城、県公文書館、県立芸大を扱うこと。</li> </ul>
8月7日	1室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学徒動員」について、もっと解説スペースを割いて欲しいとの要望がある。</li> <li>・「十・十空襲以降」のパネル解説の主展開内容とできないか。</li> </ul>
	5室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「アジア・太平洋の情勢」の独立パネルでの解説は、中止。「日本の敗戦」「核の時代の始まり」とあわせた解説展開とする。</li> <li>・その位置には、「学校の再開」を解説する。</li> <li>・「土地闘争」はここで展開する内容を、後の項目の「民衆の怒り」への移設も含め再検討する。</li> <li>・「復帰後も続く事件事故」での「事件・事故年表」は、復帰後のあゆみ全般とし、事件・事故のみを解説する展示にはしない。</li> </ul>

出典：『琉球新報』1999年10月9日付

#### ④ 展示変更問題

##### 1 沖縄県三役の展示への不満と県当局の展示改竄

一九九九年三月、監修委員会による展示の基本案がほぼまとまったのを受け、三月三日、県庁職員による県三役への展示内容の説明が行われた。そこでの主要なやり取りは以下の通りである。<sup>34)</sup>

稲嶺知事 事実ではあるが余りに反日的になつてはいけない。

回答 学問的に検証された歴史的事実に基づき、文部省検定の教科書記述などを基本に展示を行う。

稲嶺知事 沖縄も日本の一県にすぎないので、日本全体の展示(記述)についても考えなければならぬ。

回答 日本全体の中で沖縄を位置づけて理解できるように展示するということであり、他県の資料館もそうした展示となっている。

牧野副知事 全体としてバランスのある展示をしてもらいたい。

回答 そのように考えている。社会通念として共通に理解されている立場で展示を行っていく。

牧野副知事 ユネスコ、世界人権宣言だけでは平和は保つていけない。精神論だけでは出来ない。軍備があるから戦争が起こるのではない。国連の機構図や安保理の動き、日米安保条約なども紹介すべきではないか。

この要望を受けた関係県庁職員が、展示業者(乃村)に提示した最初の指示が、表6の四月六日の「検討結果の説明」である。三役の要望結果が、沖縄は日本の一県、など総論的な部分を含め、かなりストレートに業者に伝えられていることが分かる。そして具体的な所では、「十五年戦争」という呼称の削除、第一室の展示再検討、基地に起因する事

件・事故の数量的な相対化、Aサインバーの展示改変、現在の国連に関する展示の追加、子ども展示の構造的暴力の部分のタイトル見直しが表示された。

その後、五月頃、「虐殺」を「犠牲」に、「集団自決」に関する記述の書き換え、ガマの展示室の用語検討などの作業が進められ、それらの「検討結果」は六月一六日に業者に指示された(表6)。大きくいって、日本の対外侵略・加害、日本軍の対沖縄人観を示す資料や出来事(スパイ取締)、沖縄の自立性や日本政府への対抗を示す出来事、日本国内の人権差別を示す展示が避けられている様が見取れる。また、エントランスの沖縄戦の風景の削除と差し替え、さらにこの段階で魚雷の野外展示が提案されている。後に突然浮上したかに見えた屋外の展示は、戦争・軍隊の展示イメージの改変を図る中で提案されていたのである。さらに、この改変指示の延長上に、七月九日の業者への指示が行われた。やはり加害、ガマの描き方の変更、さらに国連の新規項目化が改めて指示された。

## 2 改題後の展示案

表7は、展示改変作業がここまで来た段階での展示案である(各欄の修正案が改変作業後の案)。第一室「沖縄戦への道」では、展示項目・展示細目から「十五年戦争」という呼称がすべて外された。資料例では、「カメラが捉えた皇民化政策」・日本軍にとっての沖縄の位置付けが見える資料、沖縄内部で戦争動員を煽ったプロバガンダ、「カメラが捉えた日本の加害」の全面削除、アジア民衆の抵抗の削除、兵舎となった民家、スパイ取締、ニュートラルゾーンの資料の分散移動、第二室では、砲弾跡が残る壁の資料変更(鉄の暴風のイメージにかかわる変更か)、朝鮮人・台湾人虐殺資料の削除、青酸カリ処理資料の削除など。ガマ内部の情景の変更はこの資料では伺えないが、七月一五日、監修委員三名の

「ガマ造形中間検査」で、銃を持たない日本兵が作られていたことが「発見」された。

第五室(戦後)の変更は、第一室以上に上る。米軍の沖縄上陸と同時に南西諸島の軍政施行を宣言したニミッツ布告の削除、原爆投下関係の削除、天皇メッセージ削除、収容された朝鮮人軍夫削除(朝鮮人関係は、戦前戦中戦後まで含め徹底的に排除されている)、米ソ冷戦化の軍事開発の削除、国共内戦への沖縄関与資料の削除、ベトナム反戦削除、重要な削除としてキーストーン・オブ・パシフィック沖縄の項目丸ごと消去、高等弁務官の沖縄統治の位置付け変更(抑圧的側面を薄め、恩恵的側面を強調)、特飲街・Aサインバーの風景の縮小と変更、ドル交換所削除、土地接収に関わる八重山移住削除、米軍犯罪事件の呼称変更、日米首脳会談資料の追加、復帰後のインフラ整備の強調、沖縄ルネッサンス・活躍するウチナンチュの削除、アジアの平和共存的動きの削除、アジアとの関係での残された課題の削除(慰安婦問題、領土問題)、特措法改正・国際都市形成・SACO最終報告削除、国際連合の追加など多数であり、監修委員会の積極的な議論の成果を大きく削ぐ、深刻な内容改変であった。

子ども・プロセス展示については、表5右欄のように、現代世界の構造的暴力を項目タイトルがすべて柔らかな表現となった。

このような四ヶ月間の改変作業をへて、七月二三日、再び県庁職員による県三役への展示説明が行われた。それでのやり取りは以下の通りである。<sup>36)</sup>

稲嶺知事 当初の案とほとんど変わっていない。県政は代わったのに。サミットで全国からいろんな人たちが来る。

文化国際局長 展示工事も進んでいる。固定的部分はあるのが難しい。写真、パネルなどの表現は検討し、作業を進めている。

稲嶺知事 基本ベースは変えられないわけですね。

表7 1999年7月末段階での展示案(3月段階での原案との比較)

\*修正欄の記載は、原案に対する修正案が提示された場合のみ。資料例の事例も修正の場合のみ。

展示テーマ	展示項目		展示細目		資料項目		候補となる具体的な資料例				
	原案	修正案	原案	修正案	原案	修正案	原案	修正案			
I 沖縄戦への道	近代沖縄	プロローグ	プロローグ		沖縄の原風景		ベリーなど欧米人が見たアジア・琉球				
							琉球の民衆		欧米人が描いた沖縄風景		
									明治大正期の沖縄風景 沖縄の自然風景		
									欧米人が描いた沖縄の民衆		
		近代沖縄	琉球処分と国境画定		琉球処分と国境画定		琉球の民衆		欧米人が描いた沖縄の民衆		
							琉球の中での沖縄へ (琉球処分)		19世紀後半の東アジアと日本		
									琉球藩の設置 尚泰王肖像		
									先島への警察の駐屯		
									台湾征伐 西郷従道肖像		
									分島問題 津波古政正肖像 李鴻章肖像 グラント肖像		
		近代日本の領土拡大					日本が関与した戦争と日本領土の変遷		脱清人 脱清人肖像		
									沖繩県の設置 松田道之肖像 沖繩県印 等		
							世界・日本・沖縄年表 日本領土の変遷図				
							日本が関与した戦争				
							「蜜の光」の歌詞に見る領土拡大 当時の地図				
							日韓併合 朝鮮総督府 韓国併合条約				
皇民化政策	日本への同化政策				戦後恐慌と沖縄		日韓併合を物語る資料				
							対華21か条の要求 対華21か条の要求文				
							戦後恐慌と沖縄				
							戦後恐慌と沖縄				
					教育勅語と御真影		教育勅語と御真影 御真影ノ拝礼 奉安殿 奉安殿設置場所				

						教育勅語	
				標準語励行		標準語励行 標準語化運動を報じる新聞 標準語励行を物語る資料	
				改姓改名運動		改姓改名運動 改姓改名の実例 改姓改名を報じる新聞 改姓改名運動を物語る資料	
				風俗改良運動		風俗改良運動 風俗の変遷	
				鳥居・神社の設置とユタの弾圧		鳥居・神社の設置とユタの弾圧 沖縄に建てられた神社	
				植民地、占領地での皇民化政策		植民地、占領地での皇民化政策 カメラが捉えた皇民化政策 ・「学べ日本語を」のポスター ・アジア万歳のスローガン ・三重運動のポスター 皇民化政策を物語る資料	消去 消去 消去
		軍隊と沖縄		徴兵制		徴兵制 徴兵制のシステム 徴兵検査風景 大日本帝国憲法 皇軍の組織	
						在郷部隊 全国の在郷部隊	消去 消去
						沖縄連隊区司令部 沖縄連隊区司令部風景 沖縄防備対策（施設状況）	沖縄防備対策（概説）
			戦後恐慌と沖縄	日本軍の沖縄県人観	戦後恐慌 世界恐慌 沖縄の経済状況	日本軍の沖縄県人観 日本軍の沖縄県人観 ・「沖縄防備対策（概説）」より ・「沖縄警備隊区徴募概況」より ・「沖縄県の歴史的関係及び人情風俗」より	消去 消去 消去 消去
15年戦争とアジア・太平洋戦争	アジア・太平洋戦争	15年戦争の展開	アジア・太平洋戦争の展開	泥沼化する侵略戦争		世界・日本・沖縄年表 日本の軍国化と侵略戦争 日本領土の変遷（侵略地域の拡大） アジア・太平洋地域の資源分布 等 軍国化する社会 軍国化する社会を物語る資料 ・八紘一宇の杜 愛馬進軍歌のレコード 等	消去
				大橋大尉の顕彰	消去	大橋大尉の顕彰 新聞記事 等	消去 消去
				久松五勇士の顕彰		久松五勇士の顕彰 記念碑 等	

			博愛記念碑の建立	消去	博愛記念碑の建立 記念碑	消去 消去
					博愛が載った修身教科書	消去
	国策移民		満蒙開拓移民		満蒙開拓移民 満州への入植風景 大陸の花嫁	移民分布図
					満蒙移民を物語る資料	
			南洋庁と南洋興発 (南興コンツェルン)		南洋庁と南洋興発(南興コンツェルン) 南洋庁	
					移民の奨励を物語る資料	
			沖縄県の南洋移民		沖縄県の南洋移民 南洋諸島在住人口と沖縄移民の割合 沖縄県出身の移民の推移 拓南訓練所	
					沖縄の移民政策を物語る資料	
			移民先での生活		移民先での生活 出身地別賃金表 移民先での生活風景	
	アジア・太平洋諸国の 眼から見た15年戦争	アジア・太平洋諸国の 眼から見た戦争	外国の教科書に見る 日本の侵略		日本の侵略を描いた教科書イラスト 外国の教科書	
					教科書の訳文	
			カメラが捉えた日本の 加害	消去	カメラが捉えた日本の加害	消去
					カメラが捉えた日本の加害 ・南京に押し寄せる日本 ・中国平頂山 ・731部隊の全景 ・集められた死体の山 ・シーク教徒の殺害 ・フィリピンでの日本軍による処罰 ・シンガポールで発掘された犠牲者	消去 消去 消去 消去 消去 消去 消去
			民衆の抵抗	消去	民衆の抵抗 民衆の抵抗を物語る資料 ・朝鮮民衆の抵抗を記念した切手	消去 消去 消去
	テーマ企画展示		(アジア・太平洋諸国の平和博物館等で企画された展示を誘致する)			
太平洋戦争の 概況	太平洋戦争の概況と 米軍の反撃	太平洋戦争の概況	太平洋戦争開戦		太平洋戦争開戦とマレーシア・香港への侵攻 急速に拡大した戦線 開戦を報じる新聞	
					開戦詔書	
			米軍の反撃		米軍の反撃 米軍の反撃ルート 絶対国防圏	絶対国防圏、年表
			南洋諸島の陥落		南洋諸島の陥落 南洋諸島での戦闘風景	
					南洋諸島での戦闘を物語る資料	

				本土への空襲		本土への空襲 航空機の作戦可能距離 本土空襲の日時と出撃地 等	
				沖縄に迫る米軍		米軍の軌跡と45年3月の状況	
		日米戦闘下での沖縄 移民・現地住民の犠 牲	沖縄からの移住者と 現地住民の犠牲	沖縄移民・現地住民 の犠牲		沖縄移民・現地住民の犠牲者数 カメラが捉えた沖縄移民・現地住民 フィルムに残された沖縄移民	
沖縄戦の前夜		32軍の展開と根こそ ぎ動員	32軍の展開と県民の 動員	32軍の展開とねこそ ぎ動員	32軍の展開と県民の 動員	防衛召集された住民	
				飛行場の建設		飛行場の建設 日本軍が建設した主な飛行場 飛行場建設風景	
				32軍の展開		32軍の展開 32軍首脳部記念写真 32軍の組織	(牛島司令官訓示)
						兵舎となった民家 兵舎となった民家の風景 ・「□□□□」より(注:□はママ)	消去 消去 消去
						慰安所の設置 沖縄県慰安所マップ 慰安所の設置を示す資料	
				スパイ取締り	戦時統制	スパイ取締り スパイ取締りを物語る資料 国土隊 スパイ狩りを指示した国土隊の秘密文書	消去 消去
				総動員体制		総動員体制 総動員体制の推移 総動員体制と隣組 敵性語の排斥 戦時標語 総動員体制の風景 目的別動員	(非戦・反戦の動き) (弾圧された人々)
				勤労働員		勤労働員 勤労働員された住民	
				陣地構築への動員		陣地構築への動員 日本軍陣地 陣地構築に関する資料 陣地構築風景	
				防衛召集		防衛召集 防衛隊と少年兵 防衛召集に関する資料	

			学徒の動員		学徒の動員 学徒隊隊員 学徒隊動員の経緯 鉄血勳皇隊所属の男子学徒隊 高等女学校の戦場動員 軍事教練風景		
		疎開と戦時船舶遭難	疎開		疎開（一般・学童） 疎開した地域の分布図 疎開風景 学童疎開に関する資料		
			船舶遭難		船舶遭難 遭難した船舶と死没者数 遭難した船舶 ・湖南丸 ・嘉義丸 遭難した船舶・遭難場所・乗船者数 等	消去(検索システム) 消去(検索システム)	
		10・10空襲	10・10空襲		10・10空襲前の那覇空撮 沖縄全県上空の空襲状況（奄美大島含む） 那覇市内の焼失した地域 沖縄周辺天気図 灰塵と帰した那覇空襲 炎上、焼失する沖縄の街		
			10・10空襲以降		10・10空襲以降	台湾沖航空戦（10.12～10.15） レイテ決戦（10.20～） 近衛上奏文	
			沖縄戦前夜		沖縄戦前夜	沖縄前直前の日本軍の配置 日米比較 年表（10.10～3.25）	
ニュートラルゾーン1	本土決戦準備の捨石作戦	本土決戦準備のための持久作戦	牛島司令官の訓示		牛島司令官の訓示文	（第1展示室へ移動）	
			近衛文磨元首相の上奏		近衛文磨元首相の上奏文	（第1展示室へ移動）	
	日米の装備と作戦		日本軍の装備と作戦	日本軍の装備と作戦	日本軍の装備と作戦		
					戦陣訓		
					日本軍の装備		（第2展示室へ移動）
					日本軍の砲兵器		（第2展示室へ移動）
					日本軍の特攻作戦（陸・海・空の作戦） 沖縄戦に投入された航空機 九州、台湾の特攻機出撃基地		（第2展示室へ移動）
					特攻作戦の記録		（第2展示室へ移動）
					日本軍の特攻兵器		（第2展示室へ移動）
					米軍の装備と作戦		（第2展示室へ移動）
民事ハンドブック		（第2展示室へ移動）					

					米軍の装備	(第2展示室へ移動)		
					米軍の大量殺戮兵器	(第2展示室へ移動)		
				米軍の対日攻略作戦	米軍の対日攻略作戦 オレンジプラン オリンピック作戦、コロネット作戦	(第2展示室へ移動)		
		本土での地上決戦準備	本土での地上決戦準備		広がる兵役年齢 本土決戦への備え	(第2展示室へ移動)		
			鉄血勤皇隊の表彰		鉄血勤皇隊の表彰 表彰を報じる新聞記事	(第2展示室へ移動)		
					沖縄県立一中の表彰状	(第2展示室へ移動)		
II 沖縄戦と住民	沖縄戦の経緯	鉄の暴風		砲弾跡が残る壁	砲弾跡が残る壁 ・「首里教会被災写真」より ・「伊江島の公益質屋」より ・「前新屋の水タンク跡」より	南風原町水タンク跡 県庁門柱、那覇署 糸満の水槽		
				米軍の猛攻撃	米軍の猛攻撃			
				破壊された文化財や原風景	破壊された文化財や原風景 旧国宝重文一覧表 破壊された建物 破壊された文化財の残骸 大正・昭和期の沖縄風景			
		沖縄戦の戦闘経緯		沖縄戦の戦闘経緯		沖縄戦の地形と戦闘経緯	沖縄の地形と戦闘経緯	
						戦闘経過（海上封鎖と制海空権、地上戦）		
						沖縄戦の戦闘風景		
						破壊された原風景		
				慶良間諸島の戦闘	慶良間諸島の戦闘 慶良間諸島の戦闘経過 慶良間諸島の「集団自決」と処刑 慶良間諸島の戦闘風景			
				上陸時の戦闘状況	上陸時の戦闘状況 上陸した米軍の師団と上陸ルート 上陸3日間の状況 等 米軍上陸風景			
				北部の戦闘状況	北部の戦闘状況 本部半島の戦闘経過 4月20日までの戦闘 等 北部の戦闘風景			
		伊江島の戦闘	伊江島の戦闘一軍民一体の戦い 伊江島の米軍上陸ルート 「集団自決」があったアハシャガマ 伊江島の日本軍陣地 伊江島の戦闘風景					
		伊是名・伊平屋島の戦闘	伊是名・伊平屋島の戦闘 伊是名・伊平屋島の戦闘風景 等					

	中部の戦闘状況	中部の戦闘状況 米軍の前線と日本軍の反撃 日本軍の反撃計画と米軍の進攻	
		中部の激戦風景	
	首里陥落	首里陥落 首里陥落の状況 32軍壕	
		破壊された首里	
		沖縄戦の経緯を報じる新聞・雑誌	
	南部の戦闘状況	南部の戦闘状況 日本守備軍陣地（6.9） 本島南部の米軍第10軍進攻 日本軍最後の抵抗拠点（6.18～21）	
		南部の掃討作戦風景	
	久米島の状況	久米島の状況 虐殺があった地域 久米島の戦闘風景	
	先島の状況	先島の状況 八重山群島におけるマラリア犠牲者 先島の軍事施設 先島の戦闘風景 等	
沖縄戦の住民犠牲の諸相	日本軍による住民犠牲	日本軍による住民犠牲 日本軍による住民犠牲の数	
		朝鮮人の虐殺、台湾人の虐殺	消去
		スパイ視虐殺（遊撃隊）	
		壕追い出し 壕追い出しの数	
		食糧強奪	
		乳幼児虐殺	
	青酸カリ処置	青酸カリ処置	消去
		アンプル・注射器 等	
	日本軍による「集団自決」	日本軍による「集団自決」	
		「集団自決」に使われたと思われる刃物	
ガマ	ガマ 南部一帯のガマの分布図 ガマの状況		
墓と住民	墓と住民 亀甲墓風景		
餓死（食糧事情）	餓死（食糧事情）		
	当時の食糧		

				一家全滅	一家全滅 米須部落の被害 国吉部落の被害 市町村別一家全滅の数 一家全滅の屋敷跡			
				マラリアによる被害	マラリアによる被害 消毒薬散布			
			遺品が語る戦場					
ニュートラル ゾーン2		牛島司令官の最後の 命令		牛島司令官の命令	南部撤退時の命令 最後の命令			
				日米戦力の比較	日米戦力の比較 日米の投入兵力 日本軍の投入兵器 米軍の投入兵器			
				米軍が打ち込んだ砲 弾数	米軍が打ち込んだ砲弾数			
沖縄戦の実相		死の彷徨		住民の避難経路	住民の避難経路 住民の避難経路（ルート） 来館者が体験した避難経路を記入するコー ナー			
				カメラが捉えた戦場	カメラが捉えた戦場			
				被災した住民の衣服	被災した住民の衣服 被災した住民の衣服			
				投降勧告のビラ	投降勧告のビラ各種			
				艦砲射撃、砲撃の音	艦砲射撃、砲撃の音			
				ガマでの惨劇	沖縄戦とガマ	軍民雑居のガマ内部 の情景 ガマの居住環境	軍民雑居のガマ内部の情景 ガマの居住環境 炊事用具 食器類、瓶類 個人的な持ち物 洗面用具	
		遺品が語る戦場	水が入ったままの水 筒	遺品	炊事用具 食器類、瓶類 個人的な持ち物 洗面用具			
				戦火で焼かれた品々	戦火で焼かれた品々			
		ニュートラル ゾーン3		沖縄戦の犠牲者		沖縄戦の戦没者	沖縄戦戦没者総数 戦没場所 沖縄県人口に占める戦死者の割合	(第3展示室へ移動) (第3展示室へ移動) (第3展示室へ移動)
証言の部屋		住民の沖縄戦証言集		南部撤退時の証言	南部撤退時の証言（現資料館）			
				死の道連れ証言	死の道連れ証言（現資料館）			
				ガマの証言	ガマの証言（現資料館）			

				汚辱の戦場の証言		汚辱の戦場の証言 (現資料館)	
				真栄平の虐殺の証言		真栄平の虐殺の証言 (現資料館)	
				シューサイドクリフの証言		シューサイドクリフの証言 (現資料館)	
				北部や離島の状況の証言		北部や離島の状況の証言 (調査選定未着手)	
			住民の沖縄戦証言映像	住民の沖縄戦証言映像		住民の沖縄戦証言映像	
			水が入ったままの水筒	水が入ったままの水筒		水が入ったままの水筒	
	ニュートラルゾーン4		沖縄戦の教訓	現資料館のむすびの言葉			
Ⅲ 太平洋の要石・沖縄	米軍占領下の沖縄住民	沖縄占領		ヘーグ陸戦法規		ヘーグ陸戦法規	
				ニミッツ布告	消去	ニミッツ布告	消去
						ニミッツ布告第1号 (和文・英文)	消去
				対日攻略基地建設		対日攻略基地建設	
						対日攻略のため拡張整備された飛行場と港	
						戦車集積場 (地図)	
				原爆投下と日本の敗戦	日本の敗戦	原爆投下	消去
						ポツダム会談 (45. 7)	
						ソ連参戦	
						広島への原爆投下 長崎への原爆投下	消去 消去
						広島・長崎原爆投下機の飛行ルート	消去
						焦土と化した広島・長崎	消去
						日本の敗戦	
						伊江島に着いた日本の降伏使節団 (45. 8. 19) マニラから読谷飛行場に降り立ったマッカーサー (45. 8. 29) 厚木に降り立つマッカーサー (45. 8. 30) 降伏使節団、マッカーサーの飛行ルート	
		降伏調印	降伏調印 ミズリー号上での降伏調印 (45. 9. 2) 南西諸島守備軍の降伏調印 (45. 9. 7) 先島群島司令官が調印した降伏文書				
		占領軍の政策	行政分離	行政分離と沖縄諮詢会 沖縄民政府 四群島政府知事 (1947)			
				引揚げと日琉軍人の分離 沖縄での引揚げルート 引揚げ者上陸地 (インスミ) の風景			
				琉球人引揚げ計画最終報告書			
				分離占領された日本			

				日本敗戦直後のアジアの情勢 ヘーグ陸戦法規違反	
				琉球船舶旗	消去
				琉球船舶旗	
				幻の琉球国旗	消去
				幻の琉球国旗	
			GHQと日本政府の 沖縄処理	GHQと日本政府の沖縄処理	
				マッカーサー行政分離宣言 (46. 1. 29) 天皇メッセージを伝える米国務省宛覚書 (47. 9. 22) 天皇と会見したマッカーサー (45. 9. 27) 等	消去
	廃墟の中での生活再 建	収容所の開設		捕虜収容所・難民収容所の開設 収容所の位置 収容所風景 ・捕虜収容所へ移される朝鮮人軍夫	消去
				収容所と引揚風景	
				収容所生活を物語る品々	
				食糧の配給 食糧の配給風景	
				配給所で用いられていた品々	
				学校の再開 当時の教室風景	
				コンセット校舎での授業	
				診療所 収容所内の診療所 (マラリア) 風景	
				フェンスで囲まれた収容所のテント 収容所での生活風景	
		収容所から故郷へ		収容所から故郷へ 那覇軍港の開放の推移 消失した村、新しく生まれた村 基地周辺に誕生した街の風景	
		軍作業		軍作業 賃金格差 (米・比・沖) 米軍で働く人々 那覇港風景	
				軍作業に関わる品々	
				戦果 戦果取り締り風景	
				戦果品と思われる品々	
		窮乏生活		窮乏生活 カバヤー風景 規格住宅 窮乏生活の様子	

					窮乏生活風景	
					代用品払い下げ品 ジェラルミン製の日用品 泡盛製造機 ガリ版刷りの教科書	
					ガスボンベ利用の警鐘 ガスボンベの警鐘を叩く婦人	
					警鐘	
					海外移民の沖縄救護運動 救護物資	
			闇市と密貿易		闇市と密貿易 主要な密貿易ルート 警官の検査を受ける漁船 賑わう闇市	
					密貿易の品々	
			スクラップブーム		スクラップブーム／金属を集める人々	
アジア・太平洋の中の沖縄	核の時代の始まり		核の時代の始まり		世界の核実験回数 世界の核実験場 ビキニ環礁の核実験 ビキニ核実験のきのこ雲 死の灰を浴びた第5福竜丸	
					世界の核実験のきのこ雲	
					国連の設置 国連憲章 国連風景	消去 消去
				東西冷戦構造	東西冷戦構造 米ソの軍拡競争と緊張 「鉄のカーテン」演説 キューバ危機	
					軍拡と米ソの宇宙開発 米ソ宇宙開発年表 ミサイルとロケット ・スプートニク ・ICBM ・アポロ	消去 消去 消去 消去 消去
	アジア・太平洋の情勢		国共内戦	中華人民共和国	国共内戦 国共内戦の推移 中華人民共和国の成立(49.10.1)	消去 消去
					国民党軍の為の沖縄の物資集積所	消去
			朝鮮戦争		朝鮮戦争 朝鮮戦争の推移 朝鮮戦争の勃発	
			中国と朝鮮半島を睨む沖縄		中国と朝鮮半島を睨む沖縄 49年～60年頃の基地機能図 基地機能を物語る写真	

				ベトナム戦争		ベトナム戦争 米国の軍事介入 米軍の攻撃に晒されるベトナム ・逃げ惑う少女	消去
				ベトナム戦争の出撃 基地・沖縄		ベトナム戦争の出撃基地・沖縄 60年～72年頃の基地機能図 基地機能を物語る写真 グリーンベレーの展開 ベトナム戦争反対運動	消去
						沖縄の基地地図の青焼き (1971頃) 軍事演習に使われた葉巻類の数々	消去
				太平洋諸島の状況		太平洋諸島の状況 米国信託統治領の分布 アジア・太平洋の前進基地グアム	
				平和憲法と米核傘下 で高度成長する日本		平和憲法と米核傘下で高度成長する日本 日本国憲法の発布 対日講和条約・安保条約の調印 高度成長	
		キーストン・オブ・ ザ・パシフィック沖縄	消去	キーストン・オブ・ ザ・パシフィック沖縄	消去	沖縄を中心に見たアジア・太平洋	消去
						アイゼンハワー大統領の年頭教書	消去
基地の重圧と 住民	基地と住民	米国の沖縄支配	高等弁務官の沖縄統 治	高等弁務官と琉球政 府		高等弁務官と琉球政府 行政機構の変遷 歴代高等弁務官 歴代行政主席 琉球政府ビル	
						高等弁務官と琉球政府に関する資料 ・高等弁務官の印 ・琉球政府の印	消去 ・琉球政府の印・行 政主席の印
						琉米親善と宣撫工作 琉米親善 琉米親善と宣撫工作 黄金援助(弁務官資金、グラント作り支援等) 琉米文化会館 琉米親善風景	琉米親善 米軍統治下の諸施策 を展示
		人権抑圧		渡航の制限		渡航の制限 渡航制限にあった瀬長氏、屋良氏	
						渡航制限を物語る資料	
						言論の弾圧	言論の弾圧 集成刑法 (1955) 言論弾圧を物語る資料
		革新団体の弾圧と強 権行使		復帰運動などの弾圧	革新団体の弾圧と強権行使 数々の事件	消去	
		基地の街の生活		市場		市場	
						市場の風景	
						市場で売られた品々	

		センター通り		センター通り	
				センター通りの風景 ・特飲街 ・床屋 ・フロアショー	・スーベニアショップ 消去 消去
		Aサインバー		Aサインバー	
				Aサインバーの風景 ・店で働く女性 ・米兵（ベトナム帰休兵） ・街をパトロールするMP	消去 消去 消去
				米国製の品々	
		ドル交換所	消去	ドル交換所	消去
				ドル交換所の風景 ・ドル交換を行なう銀行 ・警備に当たる米兵 ・交換業務をする行員 ・交換の順を待つ人 ・交換所の看板	消去 消去 消去 消去 消去
		基地内労働		基地内労働	
				基地内労働に関わる風景	
		ガソリンスタンド	消去	ガソリンスタンド	消去（北部・離島の戦後）
				単位換算表	消去
				ガソリンスタンドの風景 ・タクシー ・身分証 ・通行証 ・その他	消去 消去 消去 消去
	強化される基地	強化される基地		B52の翼	
				B52と黙認耕作地	
				キープアウトを命ずる米兵	消去
				基地内立ち入り禁止の看板	
		土地接収		土地接収	
				土地接収を合法化する布告・布令	
				土地接収風景	
				八重山移住に関する資料（未定） 南米移民のパスポート	消去
				プライス勧告	消去
				プライス勧告	
				プライス勧告に反対する四原則貫徹県民大会	
				プライス勧告反対の資料	

				核兵器の配備と演習		メースBミサイルの配備 (1961) メースB飛行風景写真 メースBの攻撃範囲 メースBミサイル基地(写真、平面図、立体図)		
						核模擬爆弾演習	消去	
						核模擬爆弾投下の写真 核模擬爆弾BDU 8、BDU12 (1964頃)	消去	
				B52の配備		B52の配備	B52の配備	
						B52の脅威 B52の大きさ、装備		
				毒ガスの配備		毒ガスの配備		
						毒ガス砲弾 毒ガス移送風景 毒ガス移送経路図 毒ガスの貯蔵場所 (レッドハット・エリア)		
						毒ガス移送に関する資料		
		基地に起因する事件・事故		基地に起因する事件・事故		基地に起因する事件・事故年表		
						基地に起因する事件・事故		
				軍人・軍属による犯罪・事件		軍人・軍属による犯罪・事件		
						代表的な犯罪・事件 ・由美子ちゃん事件 ・棚原隆子ちゃん事件 ・国場君轍殺事件		・幼女暴行殺人事件 ・トレーラー圧死事件 ・中学生れき殺事件
				墜落事件		墜落事件		
						代表的な墜落事件		
						墜落したB52の破片		
				基地建設と環境破壊		基地建設と環境破壊		
						代表的な環境破壊 ・PCB汚染	消去	
		民衆の怒り	住民の怒り	民衆の怒り	住民の怒り	民衆の怒り		
				土地闘争		伊江島の島ぐるみ闘争		
				アイゼンハワー訪沖とアイクデモ		アイゼンハワー訪沖に抗議する人々		
				B52撤去闘争		B52撤去の抗議デモ		
				全軍労闘争		全軍労闘争の基地労働者		
				コザ騒動		コザ騒動		
						コザ騒動風景/車両焼き討ち状況		
燃え上がる復帰運動	祖国復帰運動	沖縄と本土の復帰運動		沖縄の復帰運動		沖縄の復帰運動		
						沖縄と本土の復帰運動史		
						奄美復帰背景 (1951) 小笠原復帰 (1968)		

					祖国復帰協議会の活動 沖縄県祖国復帰協議会結成大会 復帰協宣言文	
				本土での返還運動	本土での返還運動 本土での返還運動の記録	
				復帰運動のエネルギー	復帰運動のエネルギー 復帰協活動の資料 本土での返還運動を物語る資料	
		返還交渉の経緯	沖縄返還交渉	返還交渉の経緯	佐藤首相訪沖 主席公選 国政参加 佐藤ニクソン会談 返還協定への調印をテレビで見守る屋良主席	(岸・アイゼンハワー 会談、池田・ケネディ 会談、佐藤・ジョン ソン会談、第二次佐 藤・ジョンソン会談 など)
					他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス	
					5・15メモ 5・16メモ	消去
復帰した基地 沖縄	復帰した沖縄	沖縄返還協定		沖縄返還協定	東京・ワシントンをつ結ぶ衛生中継での沖縄返 還協定調印式 沖縄返還協定批准書 屋良知事の幻の建議書 復帰対策要綱	
				復帰の日	復帰の日 屋良知事の言葉 復帰の日前後の出来事	主席・首相・大統領 のコメント、自衛隊 の移駐
		復帰で変わる沖縄		系列化される沖縄社 会	系列化される沖縄社会 復帰前後を比べる 復帰前後の風景 復帰後変わった品々 復帰特別措置 沖縄振興開発計画	
				インフラの整備	インフラの整備 整備される生活環境 汚染される海	
				通貨切り替え	通貨切り替え 通貨切り替え風景 通貨交換に関する資料	
				復帰記念イベント	復帰記念イベント 復帰記念イベント風景 復帰記念イベント資料	

				交通方法の変更	交通方法の変更	
					7・30風景	
					交通方法の変更に関する資料	
				沖縄ルネッサンス・アイデンティティーの模索	沖縄ルネッサンス・アイデンティティーの模索	沖縄アイデンティティーの模索
					沖縄の芸能、伝統工芸	
					エーサー大会	
				活躍するウチナーンチュ	活躍するウチナーンチュ	
					活躍するウチナーンチュ	
					・大城立裕（「カクテルパーティ」芥川賞1967年）	消去
					・東峰夫（「オキナワの少年」芥川賞1976年）	消去
					・又吉栄喜（「豚の報い」芥川賞1996年）	消去
					・目取貞俊（「水滴」芥川賞1997年）	消去
					・金城次郎（人間国宝）	消去
					・玉那覇有公（人間国宝）	消去
					・具志堅選手	消去
21世紀の平和創造と沖縄		変貌を逃げる世界情勢		冷戦構造の崩壊	冷戦構造の崩壊	
					冷戦構造崩壊を象徴する資料	
				平和共存を模索するアジア	平和共存を模索するアジア	
					アジアの動向年表	
					アジアの動きの光と影	
					・マルコス政権崩壊（フィリピン）	消去
					・米軍基地撤去（フィリピン）	消去
					・ソ連・中国との国交樹立（韓国）	消去
					・南北国連同時加盟（1991）（韓国）	消去
					・経済成長（韓国）	消去
					・市場経済以降と高度経済成長（中国）	消去
					・民主化・総選挙の実施（1989）（台湾）	消去
					・ドイモイ政策・市場経済（1986）（ベトナム）	消去
					・アメリカと国交樹立（1994）（ベトナム）	消去
					・天安門事件（1989）	消去
					・北朝鮮問題	消去
					・カンボジアの動向	消去
					・アフガニスタン問題	消去
				アジア・太平洋諸国と日本に残された諸問題	アジア・太平洋諸国と日本に残された諸問題	
					新聞が報じる諸問題	
					・慰安婦問題	消去
					・尖閣列島領有問題	消去
					・竹島領有問題	消去
					・南沙諸島領有問題	消去
					・北方領土問題	消去
		今日の基地問題		安保の適用と自衛隊の配備	安保の適用と自衛隊の配備	
					自衛隊機地の配置	
					全国自衛隊の配置図	
					地位協定	

				変わらぬ米軍基地		変わらぬ米軍基地	
						日本の軍事基地の推移 沖縄の在日米軍事施設の推移	
						湾岸戦争	
						復帰後も続く基地被害	
						代表的な基地被害	
						復帰後の基地被害のリスト	
						基地被害を報じる新聞記事の数々	
				沖縄の経済と基地		沖縄の経済と基地	
						沖縄経済に占める基地依存度の変化	
						軍用地料の変遷	
						活性化する返還地	
				在日米軍基地と沖縄基地		在日米軍基地と沖縄基地	
						沖縄における在日米軍の配置	
						在日米軍（沖縄を除く）配置の概要	
						米軍専用施設面積の本土・沖縄の比較 等	
						沖縄の米軍基地の分布状況	
						沖縄の米軍訓練空域・水域	
						米軍の沖縄基地における活動	
						世界の米軍基地	
						日本の防衛予算と思いやり予算	
						世界の防衛予算比較 世界の米軍駐留状況	
						米軍駐留経費の主要国負担比較	
						特措法改正	消去
						国際都市形成構想	消去
						SACO最終報告の概要	消去
	21世紀の平和創造と沖縄	次代の平和創造を目指す沖縄	国際連合	次代の平和創造を目指す沖縄	国際連合の理念 国際連合の機構 国際連合の歩み 国際連合の課題	沖縄県の非核平和宣言	エントランス導入の壁面展示へ
			沖縄からの平和のメッセージ			平和を目指す沖縄の姿 ・県知事の最高裁での最終弁論	平和を目指す沖縄の姿 消去 ・平和の礎 ・沖縄全戦没者追悼式
エントランス		今なお残る不発弾		今なお残る不発弾		不発弾 不発弾発掘状況	床下埋込展示
		沖縄戦の風景	沖縄県非核宣言文・慰霊塔・戦跡案内				

出典：1999年7月31日付「三役説明会」資料、及び「展示検討資料」

文化国際局長 制約の中で精いっぱいやっている。

石川副知事 建物などもかく、パネルについては変えられるわけですね。(中略)

牧野副知事 新県政の基本認識を入れた館にするためには新しい監修委員を入れるべきでしょう。国家に対する認識など基本的認識が全く異なる。資料館は永久に残る。展示作業そのものをストップしたらどうか。

文化国際局長 委員を代えるのは、影響が大きい。

文化国際局次長 業者との契約を大きく越えるのは難しい。設計変更となると金額の変更まで視野に入れなければならぬ。

牧野副知事 契約内容が重要か、展示の概念が重要かということになると私は展示の概念が契約よりも優先だと思う。

稲嶺知事 事実は事実でいい。私が言うのはある偏った思想で展示されると困る。

見ての通り、県三役はこれらの改変作業の結果にも、小手先の展示内容変更だとして、大きな不満を示した。知事は、サミットに集まった日本政府関係者の評価を気にしていたようだ(また普天間基地の県内移設をめぐる日本政府への交渉問題もあったと思われる)。

牧野副知事の発言は、歴史観や国際情勢認識を背景にした確信的な発言で、監修委員の入れ替え、展示設計の根本的変更まで含む大きな変更要求だった。これに対し、文化国際局長、同次長は、展示パネルの変更などでぎりぎりの対応をしていると説明している。監修委員が全く関知しない所で、県庁職員によりパネルの変更など展示の重大な改竄が行われていたのである。

再び表6に戻ると、三役への説明の後も、業者への展示改変指示がそれまで以上に急ピッチで進められていた。八月六日の指示からは、原爆・本土空襲展示が、沖縄からの視点ではなく、戦争被害一般の展示と

すべく、沖縄戦展示への移動が構想されていたことが分かる。「復帰後も続く事件・事故」は、米軍事件・事故だけを取り上げる年表から、一般の事件・事故を含む年表として性格を変えられようとしていた。ニュートラルゾーンの「むすびのことば」を新たに考えてはどうかという、資料館の基本的性格に関わる重大な提案は、副知事の強硬な発言を受けての対応と思われる。しかし、その直後の八月一日「琉球新報」が「ガマの惨劇」の模型「無断変更を報じ、展示改竄が明らかになる中で、県庁職員の指示による改変作業はストップした」。

### 3 八重山平和祈念館展示の改竄

一九九八年五月の基本方針公表を受け、八重山平和祈念館監修委員会(会長：石原昌家沖繩国際大学教授)は、同年一月二〇日に第一回目、年が明けて一九九九年一月二九日に第二回目の委員会を開催している。この時、作業部会としての専門委員会を設置した(保坂廣志琉球大学教授ら四名)。専門委員会は歴史年表の内容検討、展示資料のキャプション整理等を二月一九～二二日にかけて集中的に行っている。監修委員会は、これらの作業結果を点検し、二月二二日の委員会をもって、後の作業は専門委員会にゆだね、一応の業務を終了した<sup>37)</sup>。専門委員会は、三月も作業を進め、四月四日までは五〇点の展示パネルのキャプションが完成し、展示業者(沖繩地域工学研究所)に渡された。さらにこのキャプションは、四月一九日、展示業者から担当の県庁職員に提出された。そしてこのまま展示が行われ開館していれば何の問題もなかったわけだが、事態は四月初めから急展開していく。以下は、県庁職員の展示改変要求に対応した展示業者側の記録をまとめたものである<sup>38)</sup>。

四月九日 新任課長補佐より業者側に新平和祈念資料館との整合性を考え、展示見直しが有り得る旨を伝えられる。業者側は、展示内容の一方的な変更は地元の反発を招くと提言。

四月一三日 県庁側との打ち合わせで、基本コンセプト、基本理念そのものの見直しも必要と言われる。

四月一九日 業者側から歴史年表とキャプションの専門委員会原案を県側に提出。

四月二六日 業者は、県側から県修正案を受け取るが、修正案については監修委員会に必ず諮るよう県側に提言。

四月二八日 県側より、歴史年表はマラリアだけに絞り、削除・単純化する方針であるとの打診がある。業者は、再度監修委員会に諮るよう申し入れ。

四月三〇日 監修委員会は開けない、県の権限及び新平和資料館との整合性を盛んにいつて来て、業者側と「口論」になる。

五月七日 県側から「副知事調整後の資料」としてキャプションを受け取る。

五月一〇日 沖縄本島在住の監修委員会会長、委員に対し県庁職員が新任挨拶がてら訪問し、平面図のみを示し、キャプションの一部を口頭で説明。展示内容については変更しないと監修委員に伝えていく。しかし、会長に対しては、「最終的な監修は県の権限」とも伝えた。

この業者メモは、後に公開された「八重山平和祈念館展示内容説明資料」①四月付け（日付なし）のキャプション原本、②四月二六日付けの県庁職員による変更案、③四月三〇日付けの変更案（キャプションの大幅変更とパネル三点の削除）、④五月七日付けの順序等大きな変更を行った第三次整理案、⑤五月二八日付け最終案（点数の大幅増）とはほぼ照応しており、内容に関する信憑性は高いと思われる。そして、このメモによれば、三月二三日の県庁職員による県三役員への展示説明の結果を受けて、開館間近だった八重山平和祈念館の場合も同時に資料改竄を開始し、県の権限を監修委員会の上において、監修委員会を開催せず

に改竄作業を急ピッチで進め、五月二八日の開館にこぎつけた。監修委員に対しては、前記の資料のように五月一〇日に改竄が分らない程度の説明を行い、五月一三日の八重山在住の監修委員、専門委員に対する説明の場でも、監修委員らの疑問の声を無視して中途で切り上げるような不可解な「説明」が行われた。

この結果としての、五月二八日開館時の主要な改変を原案と比較して一覧にまとめたものが表8であるが、大きな問題となったのは資料番号34の「レクレム 星になったこどもたち」（波照間小学校児童の大パネル）が展示されていなかったことである。全児童が合唱する大パネルも、その謂れを記したキャプションも存在自体が抹殺されていた。また、専門委員会が作成した「歴史年表パネル」は倉庫に片付けられ、展示されなかった。

キャプションは全体として原案より簡略化され、展示資料の意味を分りにくくしているが、強制退去が全て「避難」に書き換えられ、日本軍と国家の責任の及ぶ叙述を避けていること（このこととの関わりからか、「八重山戦争マラリア」という表現も避けられ、八重山における「戦争マラリア」という戦争マラリア一般に解消した表現に変えている）、「集団死」が「犠牲」とされ、ここでも「集団死」の責任問題に及ぶ部分を回避していること（および残酷性の希薄化）、また八重山住民の様々な戦場動員とそれによる犠牲の姿が見えるキャプションの表現をほとんど削除していること（住民の視点の曖昧化）等が特徴的である。

開館により明らかになったこのような展示に対しては、既に早くから疑問の声が上がっていたが、八月に平和祈念資料館の展示改竄が明るみに出て世論の批判が高まるなかで、八重山平和祈念館の改竄経緯も県議会やマスコミによって大きく取りあげられ石垣島では抗議集会が開催され、マラリア犠牲者遺族会だけでなく、石垣市長や石垣市議会議長までも県知事に対し展示見直しを要請する行動に出始めた。<sup>39</sup>この結果、八重

表8 八重山平和祈念館展示内容説明文の原案・改定文比較

番号	八重山平和祈念資料館展示資料のキャプション（専門委員会原案）	左欄の資料に対応する県庁職員のキャプション修正文
3	米軍は4月1日、沖縄本島西海岸に集結し、上陸用舟艇、戦車を繰り出し、内陸部へと侵攻を開始した。	米軍は4月1日、沖縄本島の読谷村に上陸し、内陸部へと進攻を開始した。
4	5月中旬、米軍は日本軍の主陣地奪取のため、大規模な攻撃を行った。民家であろうとも前進をはばむものは全て押しつぶし、戦車を進めた。	戦車を戦闘にした米軍の進攻写真
5	防空壕に避難していた親子が、米軍によって救出され、あやうく一命をとりとめた。	壕に避難していた親子が、米軍によって救出されているところ。
6	折り重なるように倒れた住民たち。米軍の砲弾に倒れたともされているが、一説には「集団死」とも言われている。	パネル削除⇒（復活後）沖縄戦で犠牲になった人々
8	平喜名（ヘーキナー）飛行場は、港湾防備と不時着用の飛行場として戦前に建設された。戦時中、地元民や朝鮮人を動員して、飛行場の整備をはかったが1944（昭和19）年10月、米軍の大規模な空襲を受けた。	平喜名（ヘーギナー）飛行場において、1944（昭和19）年10月、米軍の空爆があった。また、艦砲射撃があったが、米軍の上陸による進攻はなかった。
9	島民は、空襲下での火災を想定し、日々消火訓練に明け暮れた。婦人達のモンペ、防空頭巾、救急袋とともにバケツ、ハタキ、はしご、メガホンは、戦時体制下の7つ道具であった。	住民の、空襲下での火災を想定した消火訓練
10	戦雲急を告げるなか、学徒らは鉄血勤皇隊となり戦地へと動員されることとなった。	八重山の学徒たちの軍事教練の際の記念写真
11	学舎は兵舎と化し、学徒らはペンを銃に代え、軍事教練に励んだ。沖縄戦が始まると学徒らは、対空監視や迫撃班、通信班に編成され、戦場動員された。	軍事教練で行進する八重山の学徒たち
12	1945年6月、石垣住民と官公庁職員に対し避難命令が出された。名蔵、白水の支庁壕2カ所には、天皇、皇后の「御真影」や八重山支庁の重要な資料が収められた。	左上より於茂登岳の東御山腹野戦病院壕跡、名蔵・白水の八重山支庁壕跡、武名田原の山頂L字壕跡、観音寺部隊の壕跡
13	強制退去は石垣島の住民のみならず、波照間、鳩間、新城、黒島、竹富の住民にまで及び全城がマラリア有病地帯であった西表島への移動を余儀なくされた。	避難状況図
14	退去経路及び退去地。戦時中、各字の住民はこのような道筋で各々の避難場所である山間部へと向かった。登野城・大川は白水、石垣は外山田・平傳、真栄里は武名田原へとそれぞれ避難した。	避難経路及び避難地。戦時中、各字の住民はこのような道筋で各々の避難場所である山間部へと向かった。
15	退去経路及び退去地。大浜、宮良は、武名田原へと避難した。	避難経路及び避難地
17	1945年（昭和20年）8月、波照間国民学校識名信升校長が、疎開地の西表島から波照間島へ引き上げる際、西表島南風見の砂岩に「忘勿石（ワスルナ石） ハテルマ シキナ」と刻んだ。刻銘は、戦争への批判と鎮魂を盛り込んだものと言われている。	1945年（昭和20年）8月、波照間国民学校識名信升校長が、避難地の西表島から波照間島へ引き上げる際、西表島南風見の砂岩に「忘勿石（ワスルナ石） ハテルマ シキナ」と刻んだ。
18	戦争のためマラリア（ヤキー）に罹患した人々は、体が焼けるような高熱に苦しんだ。患者の熱を冷ますため、井戸水が使われ、色蕉の幹が水枕の代用として使用された。	マラリア患者の看病風景
22	気象台の壁に残る機銃弾跡。気象台周辺は当時、日本軍の軍事的要所になっており、絶えず敵の攻撃にさらされた。	石垣島気象台の壁に残る機銃弾跡。
23	戦時下、民間人にあてがう医薬品（キニーネやアテプリン）がなくなり、ヨモギ、ニガナなど、戦前から行われていた民間療法が、マラリア治療薬として使われた。	戦時下、民間人にあてがう医薬品（キニーネ）がなくなり、ヨモギ、ホソバカゲン（ニガナ）を服用するなど、戦前から行われていた民間療法が、マラリア治療薬として使われた。
28	マラリア犠牲者援護会は、政府に対し、戦傷病者戦没者遺族等援護法または、それに準ずる措置を早急に講じるよう要請を行った。（写真は厚生省に要請文を提出する篠原会長）	マラリア犠牲者援護会は、国に対し、戦傷病者戦没者遺族等援護法または、それに準ずる措置を早急に講じるよう要請を行った。
29	八重山戦争マラリア犠牲者の国家補償を求め、援護会員をはじめ、石垣市長、同市議会議長、竹富町長らも参加して総決起大会を行った。1992年（平成4年）2月16日・石垣市。	八重山における戦争マラリア犠牲者の国家補償を求め、平成4年2月16日に石垣市で総決起大会が開催された。
34	「レクイエム 星になったこどもたち」は、西表島に強制疎開させられ、マラリアで亡くなった波照間小学校児童を悼む鎮魂歌。1993（平成5）年、波照間小学校全児童が「平和作文」を創作し、合作で作詞されたものである。（作曲は豊川正見教諭、編曲は上運天栄教諭）これに先だつ1984（昭和59）年、強制移住先の西表島南風見を眺望できる海岸に「学童慰霊碑」も建立された。「星になったこどもたち」は、建立式典で全児童によって披露され、以来、毎年6月23日の「学童慰霊祭」で歌われ続けている。	パネル削除
35	米軍機の空襲下、住民たちは「たこ壺」と言われた防空壕に身を潜め、ひたすら空爆の止むのを待った。	空襲避難を示した絵
36	避難小屋は、隣組単位で一棟づつ建てられ10人～40人が雑居した。内部は通路で2つに仕切られた。屋根は茅で葺かれ、柱は立ち木、床は灌木や竹で造作された。かまどやトイレは、小屋周辺に作られた。	避難所を表した絵
37	かろうじて生きながらえた島民も、相次いでマラリアに倒れた。死者は孤（こも）にくるまれ、ある者は戸板で運ばれた。また、ある者は先立った姉の傍らに埋葬された。	マラリア患者の絵

出典：沖縄県文化国際局平和推進課「八重山平和祈念館展示内容説明資料」（1999年4月）、及び、同「八重山平和祈念館展示内容説明資料」（1999年5月28日）より作成。  
重要な修正または削除が行われた展示物のみ。

山平和祈念館は、一月にリニューアルオープンすることになる。

#### 4 事件の背景と改竄批判の結果

なぜこのような改竄事件が起こったのかについては、既に石原昌家「歴史改ざんの全国的動向」(「争点沖縄戦の記憶」第三章)が、全国各地の平和博物館における日本軍の他国・他民族への加害に関わりある展示内容の批判・攻撃の一環として、沖縄の平和資料館の展示改竄問題もあつたであろうことを指摘している。また同時に、沖縄県内の新たな動きとして、新しい時代の安全保障を「現実主義的」に考えるグループの台頭を指摘している。沖縄戦時代の近代戦を担った軍隊と現在の軍備の性格を、他国侵略の軍隊か、保険・リスク管理の軍隊かと言う面で区分し、沖縄戦時代の軍隊論・戦争論にこだわってはいは、今後の時代の安全保障の展望が開けないとする議論である。

先の県三役への展示説明における、稲嶺知事の「沖縄も日本の一県にすぎないので日本全体の展示についても……」という意見は、日本の政権中枢の意向・戦争観に反しないという意味で、前者の動向の影響がはいま見られるし、牧野副知事の発言は、日米軍事同盟における沖縄の役割をより積極的に位置づけ、アピールしているという戦略さえ伺える。だからこそ、今後数十年にわたり展示が続く平和資料館の展示につき、展示のコンセプトを新たな監修委員により検討し直し、もう一度仕切り直しをすることも辞さない、という発言となつて現れて来る。屋嘉比収「戦没者の追悼と『平和の礎』」は、沖縄戦に対する歴史認識が公権力の介入によって改竄された事実、しかも沖縄内部から初めて沖縄戦の歴史認識の変更がせまられた事にこの改竄事件の新しさを指摘しているが、その『新しさ』を演出した主導力になったのは、牧野副知事に典型的に見られる沖縄からのイニシアティブ論なのではなからうか。マスコミの批判の焦点となつたガマの展示に代表される沖縄戦、あるいは戦前の展

示以上に、実は戦後の展示が、非常に多方面で改竄されたことは、このような影響の下ではなかつたのかと思われる。

従つて、八月中旬から二ヶ月に渡り県政への改竄批判が続いていても、県の担当職員たちは、国際連合展示の挿入、アメリカ統治の恩恵の強調、原爆投下と戦後の核戦略の切り離し、女性の基地被害展示への消極性などの点では、監修委員会の疑念表明にも関わらず、自己の主張をゆずらなかつた。

県側が、改竄当時の案を温存し、突然浮上させたのが魚雷の屋外展示である。開館から一年近くつた二〇〇一年一月、資料館の前庭に旧日本軍の魚雷四本と戦車のキャタピラなどの野外展示が出現した。<sup>(4)</sup>

逆に監修委員会の意向を大きく受け入れざるを得なかつたのは、改竄批判の焦点となつたガマ展示である。ガマの改竄が報道されて間もない一九九九年八月二十六日に開催された「沖縄戦拡大部会」では、「兵士は銃剣でしか住民を統制できない、銃剣を子どもに向けることが重要なのではなく、ある意味では避難民全員に向けられている、着剣して銃を持つことに意味がある」と銃剣が象徴する意味付けに改められて議論され、投降しようとする住民を狙う兵士の設定、野戦病院のなかで厄介者となつた兵士を処理しようとする衛生兵も含め、極限状態の末期のガマの中の多様な様相を貫く日本軍の論理、その日本軍と同居せざるを得ない多数の沖縄住民と言う「地下の地獄」のコンセプトが一層明確になり、展示設計に反映していった。ガマの展示は、入り口付近の避難民の居住地区、奥の安全地帯にいる日本軍の陣地地区、米軍が投降を呼びかけている洞口、包帯所地区の四つの部分で構成されているが、日本軍歩哨兵の至近距離に密集する避難民、陣地地区で地上特攻を命じられている学徒兵(ないし防衛隊)、子どもが投降ピラを拾っただけでもスパイとして処刑される可能性のある緊迫した状況、青酸カリを調合している衛生兵によって始末されようとしている冷徹な軍の姿、という「ガマの構図」

が明確になっていった。<sup>(42)</sup>

こうして銃を持たない、沖縄県民と融和した日本軍の姿を退け、日本軍の冷徹な論理を正面に据えたガマの展示が実現したことは、加害の記憶を遠ざけ、止むない戦争への突入と被害の記憶と言う日本という国家の公式な戦争の記憶に対し、異議を申し立て続けると言う点で、また、他の地域からでは提起しにくい戦争観・軍隊観を提示したと言う大きな意味を持っている。そして、日本という国家の枠内にありつつも、その戦争体験において日本軍の被害を受けたアジアの諸地域と近いことから日本人の戦争体験対アジアの民衆の戦争体験という対抗の枠からはみ出て戦争観を展開する可能性を示しているのである。<sup>(43)</sup>ただし、その沖縄戦の極限状況のなかで例えば動員された朝鮮人たちはどこにいたのかと言う問いを欠くことは出来ないが。

## おわりに

監修委員会の監督下に戻った展示準備作業では、いったん削除された重要展示の多くが復活し、さらに沖縄への核の配備問題など新資料の追加作業なども進められたが、既に指摘した県側の姿勢もからみつつ作業時間の不足はいかんともし難く、監修者自身にとっても悔いを残したままでの開館となった。

一方で、県当局は、ガマでの銃を持たない日本兵の極秘の破壊指示ほか、改竄指示資料の隠匿・部会検討資料の非公開を決めこみ、県三役もまた、変更指示など一切の責任を否定し続けた。そのなかで、県議会やマスコミの追及にも関わらず、この事件の真相と責任は明らかになっていない。監修委員会と県三役との間に平和観や政治的な基本認識の相違があるならば、異議を唱える県側が、より公の議論の展開に打って出れば、平和をどう創造するかという論争がより生産的になったであろうが、

その機会もまたこのような対応のなかで消えてしまった。<sup>(45)</sup>

さて、このような事情での開館となった平和祈念資料館の展示には、いくつかの疑問が寄せられている。戦前く沖縄戦の展示に関しては、乃村工芸社ワーキング・グループの中心であった安仁屋政昭による批判が代表的なものである。<sup>(46)</sup>安仁屋は沖縄における疎開の性格や、防衛隊・学徒隊結成と本土決戦の全体状況との関連、日本軍の捉え方、沖縄戦と基地沖縄の形成過程との関連など一〇項目について重要な疑問を指摘している。特に、「沖縄守備軍（日本軍）のうち、およそ四分の一に相当する二万五千人以上の軍人・軍属は沖縄県出身者であった」事実を前提とした時、沖縄戦の日本軍をどう描くか、どう捉えるかと言う問題提起は重要である。この点は、基本計画策定過程からの重要論点であったが、監修委員会の展示準備の議論のなかでも詰め切れなかった問題である。<sup>(47)</sup>

戦後の展示については、平良宗潤が総括的なコメントをしている。<sup>(47)</sup>平良は、米軍の沖縄占領に決定的な意味を持ったサンフランシスコ条約の解説不足、安保条約、地位協定の説明の欠如、沖縄にとつての国連の描き方、沖縄にとつての天皇の意味があまり問われていないこと、Aサイバーの説明不足、沖縄県民の土地闘争・復帰・基地反対運動が非暴力を貫き通したことの意義、などを考慮に入れた展示の充実を求めている。これらの指摘・疑問はほほうなずける所だが、さらに二、三の要望を記しておく、第一に、移民問題は、戦前・戦後を通じて、より重視する必要があるように思われる。新平和祈念資料館の展示は、従来の歴史展示に比べれば、移民展示をかなり重視しているのとは十分に見て取れるが、「南洋諸島は公式には日本の領土でないにも関わらず、日本領さながらの統治が行われ、『地上戦』では沖縄人が最も犠牲を強いられた。さらに、朝鮮人や本土の労働者、農民、現地住民の多くが犠牲となってゆく過程と実態を見れば、沖縄人ゆえの犠牲の強いられ方に加えて、戦前期、そして戦時期日本の支配構造の特徴がより明確にみてとれるよう

におもわれる」として日本の支配構造全体のなかでの沖縄人の位置を見定める必要を指摘する今泉裕美子の指摘を考慮すれば、さらにもっと注意深く位置づけられても良い部分だろう。また、戦後の移民と土地接収問題との関わり（ブラジル移民や八重山移民）を接続すると、沖縄移民が、国家の政策（国防、安全保障）に持った特殊な意味がより浮き彫りになるのではなからうか。<sup>48</sup>

第二点は、監修委員会のなかでも強く意識されていた女性の展示である。沖縄戦後の復興における女性の役割や特設街における女性たちのおかれた環境、性暴力の問題、さらに無国籍児問題など沖縄の戦後における女性の全体像が理解できる展示の工夫が求められるのではないか。<sup>49</sup>

第三は、日本軍の捉え方の問題である。新聞への投書を見ると、反国家的にならない展示や、全国民と同じ立場に立つには残酷性を示す展示を避けるべき、と言う主張も見られるが、『琉球新報』と『毎日新聞』が共同実施した世論調査によれば、「沖縄戦の実態をありのままに伝える」への支持は八〇・五％と圧倒的で、「反国家的にならない」展示への支持は七・四％である。また、「残酷性が強調されないような工夫」を選択した割合は、八・五％であった。<sup>50</sup>このうち、実態をありのままに伝えるべきと言う、特に若い世代の比率が高い要求には「私が知りたいのは日本兵とか沖縄の兵隊とかということではなく、戦争と言う世の中で、人間としてやっていけない行動があったかどうかということですよ」という主張に見られるように、「本土出身」日本兵対沖縄人と言う対抗図のなかで日本兵の残酷性を特に強調することを望んでいるわけではない。そしてまた、一部の年配の人々の投書が示すように、本土出身日本兵に助けられた記憶をもつ沖縄の人々も少なからずある。沖縄戦を考える基本的観点が沖縄住民の受けた非人間的で残酷な戦争体験を通して、戦争の不条理と残酷さを告発することにあるならば、上のような二元対立的構図とも受け取られやすい部分を再検討し、沖縄のローカルな記憶

により高い普遍性をもたせるなかで、日本国家の公式な戦争の記憶と対峙することが求められているのではないだろうか。

沖縄を代表する政治学者である宮里政玄は、大きな政治的枠組みのなかでの展示改竄事件の意味を当時以下のように指摘している。<sup>52</sup>

現在出てきているのは、『日本が米国と一緒にあって、日本外の安全保障にも協力する。例えば国連にも協力する。これを国境を越えた義務と受けとめる。つまり日本の安全に直接関係しないことについて、日本が積極的に関与していくべきだ』という考え方だ。そこから沖縄が第二次大戦の記憶にすぎているのは古くさい、時代遅れという考え方が出てくる。日本は生まれ変わったことだし、世界平和に貢献しようという。そうなると沖縄も、基地と共存してはどうか、ということになる。

その沖縄が戦争体験と占領体験を通じてつちかってきた平和意識の意味は、これまた平和学・憲法学の和田進が、以下のように端的にまとめている。<sup>53</sup>

沖縄における平和意識のあり様は『本土』のそれとは相当に異なっていると思われる。九五年以降の沖縄の闘いは、沖縄においては、軍事的なものに対する強い不信・懐疑の念が強く存在し、『平和』が依然追求すべき目標・理念として息づき、『軍の論理』に対して『生活・暮らしの論理』による対抗が強く形成されていることを、本土国民に強烈に印象付けることになった。

いまから五年あまり前のこれらの指摘が意味することは、現在の日本の国政と外交の対抗の最先端が沖縄でいち早く現れ、それが平和資料館の展示内容の問題としても表面化ということであろう。戦争と占領の記憶をどう展示するか問題は、現在の軍事・安全保障観の形成、そして政策化に深く関わる問題なのである。

註

- (1) 『沖縄県平和祈念資料館年報』第三号、二〇〇三年
- (2) 『沖縄県平和祈念資料館年報』第二号、二〇〇二年
- (3) 一九九九年一〇月七、八日、沖縄県議会「文教厚生委員会会議録」
- (4) 『沖縄タイムス』二〇〇〇年六月二二日付け
- (5) 石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利「争点・沖縄戦の記憶」『社会評論集』／沖縄県歴史教育者協議会「歴史と実践」二〇号、一九九九年一月（平和祈念資料館問題特集）／沖縄県歴史教育者協議会「歴史と実践」二二号、二〇〇〇年一月（特集 新平和祈念資料館を觀る）／石原昌家「新沖縄平和資料館展示内容変更の経緯と問題点」『歴史学研究』七三三号、二〇〇〇年二月／石原昌家「戦争」を記憶しつづけることの意味」『歴史学研究』七四二号、二〇〇〇年一〇月／鈴木光次郎「八重山平和祈念館展示資料改ざん問題」『季刊戦争責任研究』二九号、二〇〇〇年秋季号／安仁屋政昭「沖縄県立平和資料館の設立」『季刊戦争責任研究』三〇号、二〇〇〇年冬季号／屋嘉比取「戦没者の追悼と平和の礎」『季刊戦争責任研究』三六号、二〇〇二年夏季号
- (6) 沖縄戦を考える会「沖縄戦をみつめて」一九七八年（一九八三年改訂版）
- (7) 同前
- (8) 「平和への証言 沖縄県立平和祈念資料館ガイドブック」一九八三年、「沖縄県平和祈念資料館総合案内」二〇〇一年
- (9) 前掲、石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利「争点・沖縄戦の記憶」第一章
- (10) 同前、及び前掲、沖縄戦を考える会「沖縄戦をみつめて」
- (11) 中山良彦「物と証言で語らせる資料館」沖縄県歴史教育者協議会「歴史と実践」20号
- (12) 前掲、石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利「争点・沖縄戦の記憶」第一章
- (13) 沖縄県平和祈念資料館（仮称）監修委員会「沖縄戦への道・沖縄戦部会議事録」一九九九年九月一〇日、大城将保発言
- (14) 前掲、石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利「争点・沖縄戦の記憶」第一章
- (15) 証言記録の出来たこのような経過を参考にすると、今回の新資料館ではその後の市町村史の証言を加え、さらに証言の再検討を行うべきだったのだが、その実施の責任は曖昧なままに終わったのではないか。
- (16) 沖縄県平和祈念資料館（仮称）監修委員会、第四回「沖縄戦への道・沖縄戦部会議事録」一九九七年六月二四日、前掲、石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利「争点・沖縄戦の記憶」第一章
- (17) 同前「争点・沖縄戦の記憶」
- (18) 前掲、石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利「争点・沖縄戦の記憶」第二章
- (19) 沖縄県平和祈念資料館（仮称）監修委員会、「沖縄戦部会拡大部会議事録」一九九九年八月二六日
- (20) 『琉球新報』一九九九年九月二〇日、九月二八日
- (21) 前掲、石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利「争点・沖縄戦の記憶」第五章、石堂徳一「八重山平和祈念館建設の経緯」沖縄県歴史教育者協議会「歴史と実践」20号
- (22) 沖縄県知事公室「平和祈念資料館移転改築基本構想」一九九五年一月、「沖縄県平和祈念資料館年報」第一号、二〇〇一年
- (23) 大城将保「銃は誰にむけられたか」沖縄県歴史教育者協議会「歴史と実践」20号
- (24) 沖縄県知事公室「平和祈念資料館移転改築基本計画」一九九六年五月
- (25) 沖縄ノムラ「沖縄県立新平和祈念資料館基本計画（資料編部会資料）」一九九六年三月、沖縄ノムラ「沖縄県立新平和祈念資料館基本計画（資料編類似施設調査）」一九九六年三月、沖縄県立公文書館蔵
- (26) 沖縄県知事公室「平和祈念資料館移転改築基本計画」一九九六年五月
- (27) 第三三軍司令部壕の保全公開については一九九七年八月に基本計画が出されたが、その後進展していない。「沖縄タイムス」一九九八年六月二三日付け。ただし、海軍壕などの整備は行われ、内容を一新した。
- (28) 沖縄国際平和研究所基本計画（仮称）検討委員会「沖縄国際平和研究所（仮称）基本計画」一九九八年五月
- (29) 『沖縄タイムス』一九九八年六月二三日付け
- (30) 『沖縄タイムス』一九九八年二月二〇日、一九九九年二月二二日付け
- (31) 石堂徳一「八重山平和記念館建設の経緯」沖縄県歴史教育者協議会「歴史と実践」20号
- (32) 監修委員会活動経過については「沖縄県平和祈念資料館年報」第一号。なお、監修委員会での議論内容については、公開された「議事録」によった。
- (33) 荒川章二「国民精神総動員と大政翼賛運動」由比正臣編『近代日本の軌跡5 太平洋戦争』吉川弘文館、一九九五年
- (34) 『沖縄タイムス』一九九九年一〇月七日、一〇月九日

- (35) 『沖縄タイムス』一九九九年一〇月三日
- (36) 『沖縄タイムス』一九九九年一〇月七日
- (37) 『八重山平和祈念館監修委員会会議録』、『八重山平和祈念館専門委員会会議録』
- (38) 潮平正道「八重山平和資料館改ざんに関する経緯」沖縄県歴史教育者協議会『歴史と実践』20号より作成。
- (39) 『八重山毎日新聞』、『八重山日報』各号
- (40) 『季刊戦争責任研究』36号
- (41) 野外展示のあり方の問題性については『争点沖縄戦の記憶』第三部を参照されたい。
- (42) 大城将保「銃剣は誰に向けられたか」沖縄県歴史教育者協議会『歴史と実践』20号
- (43) 『けし風』25号、一九九九年二月（平和資料館問題特集）
- (44) 『琉球新報』一九九九年一〇月二十九日
- (45) 『琉球新報』一九九九年一〇月七日、八日、一四日
- (46) 『沖縄県立平和資料館の設立』『季刊戦争責任研究』30号
- (47) 沖縄県歴史教育者協議会『歴史と実践』21号、二〇〇〇年一月（特集 新平和祈念資料館を観る）
- (48) 『琉球新報』一九九九年八月一日、九月五日
- (49) 無国籍児童問題については、『琉球新報』一九九九年九月二日
- (50) 『琉球新報』一九九九年一月一二日
- (51) 『琉球新報』一九九九年一月一七日
- (52) 『琉球新報』一九九九年九月二三日
- (53) 『琉球新報』一九九九年一〇月八日

（静岡大学情報学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）  
（二〇〇五年六月八日受理、二〇〇五年七月一五日審査終了）

## **The Establishment of the New Okinawa Prefectural Peace Memorial Museum**

ARAKAWA Shoji

Since the mid 1990s, displays at war museums and peace museums throughout Japan have burst into the political (in its broad sense) spotlight. On the one hand, this attention comes from the perspective of how to overcome the obstacles that prevent positive progress in the search for peace and partnership in Asia. On the other hand, it is due to the relationships they have with Japan's contribution to an international security framework, the issues of dispatching peacekeeping forces and amending the Japanese constitution and their juxtaposition with the values of the Japanese people regarding war and peace that have been formed through their experiences during and after the war. In the past, the contents of Japanese junior and senior high school textbooks were the focus of attention when it came to views of the Japanese people on peace and war. However, this scope was gradually widened to include the war and peace museums that were in the process of being established all over the country at that time.

It was precisely at this time that the construction of a new Okinawa Prefectural Peace Memorial Museum got under way. There was a clash between both values in connection with final plans for displays, resulting in widespread debate on what was the "peace" sought by the people of Okinawa.

This paper addresses this issue from two perspectives. First, it looks back at the philosophy behind the construction of the former Okinawa Prefectural Peace Memorial Museum in the 1970s and the processes that determined which displays would give form to that philosophy. In addition to ascertaining the horizons achieved by peace displays and exhibitions in Okinawa, by overlaying the fundamental concepts behind exhibitions, master plans and debate within the supervisory committee, this paper introduces a plan for displays whose aim is the creation of peace by means of communicating to the rest of the world the "spirit of Okinawa" formed against a backdrop of wartime experiences in Okinawa and experiences during the post-war period of occupation. Second, it looks at the appearance of a concrete plan to alter displays, which represents "another" view of war and peace, thus contrasting with the existing plan.

---